

# コンラート・フィードラー「ハンス・フォン・マレー」

高阪 一治\*

Konrad Fiedler, *Hans von Marées*

KOSAKA Kazuharu

本稿の目的は後段に置く，一書としても公刊されたことのある長文の学術論文を翻訳紹介することにある。

周知のように著者コンラート・フィードラーは近代芸術学（美術学）の祖として知られるが，19世紀後半のドイツにおいて，美術保護者として，すなわち，民間におけるメセナ活動を行った者（ドイツ語で言う *Mäzen*）として語られることも多い。その保護を受けた者の代表格は画家ハンス・フォン・マレー（1837 - 1887）であった。1866年，ローマでマレーと知り合いになったフィードラーは1868年以来，短期間を除いて画家の死まで経済的支援のみならず精神的にも支持を惜しむことがなかった。その意味では美術保護者，パトロンというより，むしろ画家の最も親しい，理解ある友人といった方が適切であろうが，そのフィードラーが画家の死に際して長文の追悼文を残した。ここに紹介する論文がそれである。

ドイツ19世紀の美術史，とりわけ生涯の大半をイタリアの地で送ったハンス・フォン・マレーを研究する者からすればこれはむしろ基本文献の一である。何度かフィードラーの論集に収められている論文ではあるが，最初はいわゆる私家版として世に出たものである（筆者未見）。すなわち，Fiedler, Conrad, *Hans von Marées, seinem Andenken gewidmet*, Privatdruck, 1889. がそれである。おそらくこの形を尊重して一本として近年刊行されたものには，次のものがある。Fiedler, Conrad, *Hans von Marées, seinem Andenken gewidmet*, Frankfurt am Main 1969.

フィードラー研究からしても興味深い論文ではあるが，ドイツ美術史でも欠かすことができない，19世紀後半のいわゆる「ローマのドイツ人画家ないし美術家」（*Deutsch-Römer*）の代表的人物のひとりであるマレーの研究からすれば，このフィードラーの追悼文は，画家マレーと最も深く交流した人物の手になる，いわば内側から観察することができた関係者の言として読むことができる。これに対し，より広範囲の視野でもって，少しく距離を置いてマレーを考察したものが，今日でもマレー研究の土台を形成する次のマイアー＝グレーフェの三巻本である。Meier-Graefe, Julius, *Hans von Marées. Sein Leben und Werk*, 3Bde., München und Leipzig 1909-1910.

マレー研究の進展につれ，フィードラーのマレー論に異が唱えられることもあり，筆者もはたしてマレーはフィードラーの言うように形だけを考えていたのかどうか 疑問をもつひとりであるが，ここでは深入りせず，まずは，マレーの半生において最も近くで見護っていた著者フィードラーの語る言葉を提示することにしたい。フィードラーの著作に関しては，中央公論社，世界の名著，続15巻，『近代の芸術論』（山崎正和・物部晃二氏訳）に主著「芸術活動の根源」が翻訳刊行され，ま

---

\* KOSAKA, Kazuharu 鳥取大学地域学部附属芸術文化センター教授，美学・美術史，文化政策

た他にも金田廉、清水清の両氏の手になる翻訳が存在するが、このマレー論の翻訳はわが国では初めてだと思われる。ある研究者の言うように、フィードラーの文章は難解であり、また出典を逐一明らかにするというのではない傾向があって、研究の上でいささかの支障をきたす場合なしとしないが、その晦渋なフィードラーの文章にあって、このマレー論ではマレーの書簡が数多く引用されており、翻訳するには、そうした書簡に逐一当たり、出典を明らかにする必要があるため、その労苦を怖れて未翻訳であったのかも知れない。原著及び原著の解説にも出典は明示されていない。そのため、拙訳でも調査が行き届いていない箇所があるが、ともあれ、文中に多く引用されているマレーの書簡については、できる限り元を辿って出典を明らかにしたつもりである。

19世紀のドイツ美術史には必ず「ローマのドイツ人画家ないし美術家」が挙がってくる。また、その中でもマレーを欠かすわけにはいかない。他方、フィードラー研究から言えば、その理論形成に芸術実践面との結びつきが濃厚であると言われる割に、とりわけわが国においては、マレーとの関係は具体的に究明されていない観がある。フィードラーには作品の寄贈を通じてベルリンのボーデやミュンヘンにおけるような、美術館とのつながりもある。こうした彼のメセナ活動を研究することも、今後重要となるであろう。

美術の自律性を押さえることは、確かに重要である。しかし、その社会的機能を考察することはその自律性を考えることと矛盾するものではない。フィードラーは造形芸術の自律性、芸術の本質を押さえることに生涯を費やしたが、その彼にしてメセナ活動という社会的活動があったことを忘れてはならない。

フィードラーも指摘しているように、マレーは母国の美術状況に背を向けていた。いや、対仏戦争に勝利した後成立したドイツ帝国とその経済的繁栄の中で活況を呈することになった美術の状況に、不審の念を抱いていた。というのも、当時の公権力は美術に対しても国民意識の高揚を図る文化政策を強いたからである。幾多の施設が完成を見たが、こうした文化政策には関心を示さず、むしろ唾棄の対象として眺め、画家はアルプスを越えて、ひとり画業に没頭した。しかしそれはあまりにも孤独な作業であった。狷介孤高、精神的貴族の人と言われるこの画家の人格と時代は合わなかった。それをこの追悼論文の冒頭は物語っている。

この翻訳を介して、わが国におけるフィードラーとマレーとの結びつきの具体的な究明や、マレー研究を進展させる上での一助になれば幸いである。識者のご叱正とご指摘を仰ぎたい。

訳者註を付した翻訳の対象となった原文は、以下に所載されている。

Fiedler, Konrad, Hans von Marées 1889, In: *Schriften zur Kunst I*, Hrsg. von Gottfried Boehm, München 1971, S.369-462.

## ハンス・フォン・マレー

1889

コンラート・フィードラー 著

高阪 一治 訳

1887年6月5日、画家ハンス・フォン・マレーは短期間の重病を患った後、ローマの地で、この世を去った。この死は世の人々の注意を殆ど引かなかったものの、友人たちはこの出来事に強い衝撃を受けた。この友人の死が、彼らにとって衝撃を与えたのは、個人的な損失としてというばかり

ではない。彼らはむしろ、普遍的で広範囲にわたる意義を有すると自負するひとりの男が、こうしてひっそりと、世の人々から認められないままにこの世を去ったということに、痛ましい思いをしたのであった。すでに生前から、彼らは、彼の価値が多くの人々に顧慮されなかったということに不満を感じないわけにはいかなかった。いまや彼らは、その尊敬の的であったこの芸術家の死も、跡形もなく過ぎゆくのを見るにつけ、その不満の念は高まらざるを得なかった。彼の墓が閉じられると、友人たちは、人々の記憶に大いに生き続けるに値すると思われた有能な士が、永遠の忘却に沈むかのように思われた。悲しみの表情は狭い友人たちの結びつきの間で没し、それ以外の人々には、何の物音も伝わらず、公的生活の領域からは、何の応答もなかった。

そして、そうした不満をことのほか苦渋に満ちたものにしたものが、まだひとつあった。世の人々は、無理解や悪意にもとづいて、彼らに差し出された良き有意義なものを拒否し、そうして、彼をやむを得ない孤独に封じ込めることになったのだということ、彼らの不当なることを責め、彼らのせいにするのができたなら、このような非難の表明にも、なにがしかの満足を見つけることもできたであろう。しかし、実際、世の人々には、この驚くべき人物の謎に満ちた制作を一瞥する機会は殆ど与えられていなかった。また将来についても、今回埋葬された人物の精神的復活は、まず期待できなかった。彼のアトリエに入ると、ひとは絶えざる格闘を物語る例証に取り囲まれているのを知った。ますます更新される試みにおいて、内的直観の世界を、一定の形をもった外的存在へと発展させるために、途方もない力が費やされているように見えた。それにもかかわらず、ひとがその十全な成功を眼にすることはなかった。納得のゆく明瞭さに達した作品は、ただのひとつもなかった。通常の制作にありながら、個々の作品に唯一持続的な価値を保証するあの完成というものに、ひとはどこでも出あうことがなかった。

嘆き悲しみ、悄然として墓を取り囲んでいた友人たちのなかには、たしかに、運命に対して、いつもながらに理不尽な恣意によって、早めに生命の糸を断ち切ってしまったと、非難を強める人たちがいた。いま少し時間があれば、最後の突撃をすれば、目標が達成されたものを。生涯をかけた制作はいまや真に、終わりに近づいているということは、全てのものが示唆していた。あと数週間もすれば、着手したものがついに完成すると、このたゆまぬ努力家自身によって、予測されていた。特別高揚した気分が彼に顕著で、その気分は周りの者にも伝わっていた。周到に守られていたアトリエの秘密は、次第に明らかになっていった。個々のひとが入室を許され、その素晴らしい印象を口々に語った。友人たちは、時到来ば、ただちに彼の作品をその意義に相応しい格別な仕方ですぐに出すべく、その準備に追われていた。そのとき、突然、死神が、この気分の高揚した人物に襲いかかったのであった。生涯ではなほだ意義深い計画と思われたこの一事は、目標実現の寸前で、無益にも、潰え去ったのである。自己をひとかどの者たらしめるのに、自己抑制的な制作の一生を費やしたひとりの人物の命を奪うには、数日間の重病で十分であったが、それは、そのような者として世に現れる、矢先のことであった。〔だがそれにしても〕気まぐれな運命の残酷さを直截に証明するものはあり得たのであろうか。〔むしろ〕最良のものも屈服させた未熟な力を嘆いた人々の方が、正しかったのではあるまいか。

しかし、一方、同じ墓を取り囲んでいた者のなかには、また別の、より古くからの友人たちがいた。彼らにとっての損失感、先の、より新しい友人たちのそれに劣らないものであったし、彼らの大きな苦しみは先の者たちのものに較べて、下回るものでなかった。だが、このマレーの生涯の予期せぬ終末は、彼らにとって、違った光の下に映し出された。こんなに優れた資質の持ち主なのだから、必ずや完成作において絶えず自己を表現することができるに違いない、という彼らの確信

は、期待はずれの連続で、次第に薄らいでしまった。彼らは、たゆまず制作する手の下に成立した造形世界から、いわば不明瞭、未完成の最後の覆いが取れ、完成作が眼の前に現れる瞬間が近づいたと思えたことが、すでに何度もあった。その度に、繰り返し、彼らが味わわねばならなかったことは、実に見事な作品が、これに最後の完成の筆を入れればそれで済むというだけの作業によって、またもや問題作と化する、という事態であった。今度も同じことになるのだろう、と彼らは語りあったものである。彼らが、人気のないアトリエに足を踏み入れ、故人がその絵に捧げた最後の活動の跡を認めたとき、痛ましい確信が彼らの心に生じた。あの旧知の宿命が、またもやここでも、力をふるった。ある程度まで、内面の像を外面的に造形された存在へと引き渡すことに成功していた手は、その明瞭な絵をまたもや暗くし、台無しにしてしまった。あらゆる努力とあらゆる誤謬を、死が終わらせなかったとしたなら、いったいどうなっていたことであろうか。彼らは混濁した像に我慢がならなかったのだから、この人物が、いかなる未来、いかなる結末を迎えることになったか、そのことに思い至れば。そのなかでしか生き、制作する他はなかったイリュージョンの世界が、自らの疑念と他者の無遠慮な率直さでもって、次第にぐらついていったとしたなら、その孤独な暮らしによって、生来のすぐれた感覚がますます昂揚することとなったこの天性の人物は、どのようにすればよかったのであろうか。こうした生涯の赴くところ、満足のゆく、気が静まる結末というものは、なかった。ところで死ははなはだ予期せず、突然、訪れたのであるが、この死は、だれにもふりかかる可能性のある急速に進行する病がもとの、ごくありふれた日常的なものであった。それが襲ってきたとき、彼らは、おそらく、次のように言ってもよかったのだ。すなわち、よくあることだが、このときも、神の思し召しにより、人間的思慮では解決不能と思われていた問題が、単純であると同時に驚くべき仕業で、解決を見たのだ、と。運命がすばやく襲いかかることで、最後まで生を全うし、解決不能な葛藤に憔悴するという、どうにも避けがたい事態から、この人物を解放したということは、運命の恩寵と言うべきではなかったか。加えて、死は、この努力家を極度の満足の瞬間に拉し去ったのであった。彼は、自らがそのために生きた目標に到達した、と思った。あの美しい瞬間を彼は享受したのだ。というのも、この作者は自らの作品の前に立ち、もっぱら世の中を、自分を理解し、自分の意にそい、自分と苦楽をともしてきたものとして思い描くことができたのだから。さらに、世間との現実的な交わりも、彼が自作に覚える喜びを失わせるということではなかった。友人たちは彼をあまりにも早く失ったことを嘆き悲しんだが、しかし、まだぶち壊されていない幻影が、墓に覆われたことは、彼らの慰めとなった。

そして彼は運命そのものの手によって隠されてしまったのだから、友人たちの心から、彼とのつきあいで、常に抑えられるとは限らなかった不安の感情が、消え去った。たしかに彼は、友人たちとは別れて逝ったのではあったが、とはいえ、友人たちにとっては、まさにそのことによって彼が再び一層身近な存在になったように思えた。友人たちはわが身が、彼についての心配という重荷から解放されたことを感じたが、このことによって、彼らは、ようやく再び、この驚くべき個性を、ありのままに、また生き生きと思い浮かべることができた。同時に、彼らの心に湧き起こったのは、彼の思い出が完全に忘れられることがないように、という願望であった。彼の絵は何度も改変されてゆがんだものとなっていた。そのうちの一方の作品は、それらの評価に十分な証拠を挙げることができないにもかかわらず、過大な意義を彼に与えているし、また他方の作品は、彼の経歴では、その能力に応じてというのではなく、自らの名誉欲の求めるところに従って生きたかに思われる一人の人間の、完全な失敗としてしか映らないものである。

マレーは人生の戦いでは勝利者とならなかった。彼は自分の場合は別にして、内面の完全さと対



外的に認められていないものは認めないという、手強い心の狭さを持ち合わせていた。彼が唯一、正義を待ち望むことができたのは、次のような稀な見解に対してであった。すなわち、精神的・倫理的意義のある卓越した範例とは、努力し闘っている天性の才能のある人たちが、その自らの宿命や敵対する世の力に敗れる場合である、とするものである。このような運命を、力があってもだめになる人間の悲劇としか見られない人々に向かって、マレー自身、かつて、次のように書くことによって、答えている。「破滅する人というのは、おそらく、すでに生存中に、その人の人格がもはや何も残っていない人のことを言うのだ。」と。だがマレーは、語の全き意味において、最期までひとかどの人物であった。彼は逆境にもくじけない力でもって、彼のすぐれた洞察力の前につまらないもの、排すべきものとして立ち現れたあらゆるものに対して、心の中で、反対を表明した。これが、友人の尊敬と同時に、生前、多少とも彼の近くに居合わせた全ての人々に及ぼした、測り知れない影響力を彼に確保した、当のものであった。

1866年から67年にかけての冬、ローマでわたしがマレーと知り合ったとき、もうすでに彼は、基本的には、彼の友人たちの記憶の中に生き続けるその人物であった。困難な闘いの中であって、彼はその本性である自主独立を手に入れていた。以後の生涯で彼はさらに豊かな人間的、芸術的生長をとげたにせよ、このときすでに、彼は人間に課せられたあの最も重要な仕事を達成していた。すなわち彼は、彼の本性が要求するところと、世の中の求めるところとの間に明瞭な関係を築き、自己に忠実である限りはそこから一步も退かない、自己が抛って立つ確かな地盤を、獲得していたのである。人の価値は、自己自身に対する忠実度に基づく、とする彼の見方は、すでに早くからできていた。

1837年12月24日、エルバーフェルト〔Elberfeld〕に生まれた彼が、1864年にローマに出てきたときは、27歳になっていた。この地滞在の一年目には、長い準備の過程が、彼の内部で成熟に達していたのであろう。もちろんわたしには、それ以前の彼の生涯についての十分な情報があるわけではなかった。しかし、のちに彼がそれでもって周囲の者にはなほだ重大な影響を与えた大変に閉鎖的な人格を、すでに示していたとはいえないまでも、あのローマ滞在時まで、個々の強烈な特徴はすでに身につけているかのように映った。彼は自分の過去については殆ど語らなかつた。ほんの時折、彼に具わる顕著な物語りの才能が顔をのぞかせ、歎んで彼の人生の出来事を詳しく語るということがあった。彼は早くに失った母の思い出を、尊敬の思いをこめて大切にしていた。1874年、コブレンツの高級官僚として亡くなった父には大きな信服の念を寄せ、その多面的で、すぐれた精神的価値の持ち主であることを常々強調していた。それにもかかわらず、彼がすでに少年時代から、その本性の発達欲求と彼がその下で生長した外的条件との間に、強い対立を感じていたことは、彼の発言の数々からうかがえた。この対立感、彼が家庭や故郷といった狭い世界からより広い世の中へと出て、彼の芸術的資質を磨くのに必要な教育的要素を得ようとすればするほど、昂じざるを得なかつた。彼の才能はすでに明らかとなっていたが、コブレンツではギムナジウムに入学した。ここではその初期の授業しか受けなかつた。1853年、彼はベルリンに向かい、シュテフェックのもとで制作した。1855年、1856年とコブレンツでの兵役を終えたあと、彼はミュンヘンへ赴いた。それゆえに、彼はこの地で送った8年間に、まず強くなって男らしい自意識を得、その後、単なる受取り手としてでなく、また仕事をなす者としても、わが身が世間に対立することを感じるようになった、と仮定して、おそらく間違いはないであろう。

当時のマレーは、その時期には、人間がその内部にありとあらゆる力がみなぎるのを感じ、その本性に従って、自らが得ようと努力すべきは何なのか、ということについてまだよくわからずに、自己の努力を無制限なものと感じる、あの美しい人生の時期にあったのであろう。こうして彼は、ミュンヘンの芸術界に足を踏み入れ、たちまち非凡な才能という名声を手にするようになった。この地、ミュンヘンでマレーが置かれた状態に立ち入る理由は見あたらない。というのも、以後の彼の発展をみれば、彼がこの地で、特にこれといった影響を受けなかったことがわかるからである。彼が長らくまともに取り組んだ数々の努力や、成果に対する彼の態度は、明らかに彼の同輩のそれとは、そして、世間一般に認められた人々に対する闘いにおいて彼と結ばれていた連中のそれとさえ、全く違っていた。こうした連中は、伝統的なものに対する反抗心や、改革を求める気持ちを強く持っていたにもかかわらず、周囲の世界から踏み出せず、自己の生活基盤となる別の場を求めてはいなかった。この世界にあっては、依然としてマレーはよそ者であった。当時彼が、自らの本性の本来の使命を正当に評価しうるには、自分がこの世界から完全に排除される他はない、ということを手探りで予見していたかどうか、ということについては判断しがたい。彼はこの世界に生きた。しかしこの世界は彼にとっては、一時期、才能を試す機会を彼に与えたということ以外の意味を、殆ど持たなかった。外的刺激に触発されて彼はまだ落ち着きのない活動を展開する一方で、ひそかに、自己の本性に秘められた能力の発達が訪れるのを待ったが、この能力はその後、突如出現した無理矢理の力でもって、彼の以後の人生を決定することになった。あの時代からは、ミュンヘンのアトリエで生まれた習作と、彼の手になる多少とも完成した絵が認められるが、これらは、当時、彼の勉強仲間であったこれらの絵の所有者の手によって、よく保存され、また高い評価を得た。こうした作品から認められるのは、マレーが、ひょっとすると周囲の人々から受け取ることができたであろう支援から、すでに独立していたという事実である。とはいえ、まだ十分な独立は得ていなかった。オランダ美術に対する格別の愛着と、その研究の跡は一目瞭然である。

マレーはここで、今日、自立した才能の健全な発達を阻む困難の一つに、出くわした。彼は、芸術から多少ともその外見だけを借用していた様々な努力のまっただ中であって、自らを、よそ者と孤独だと感じていた。教えとしてであれ、手本としてであれ、彼にその時代が提示したものは、自分が芸術表現への衝動として内発的に感じるものとは何の関係も持たないとして、これを拒否した。彼は自らの確信を強める実例や、自己発展のための刺激や養分を求めて、他の多くの人と同様に、昔日の巨匠の作品へと向かった。彼はこれらのものに、自分と内面的に近いものを感じ、彼の同時代の者たちに無益に求めていたものを、見つけたのであった。しかしこれは応急処置でしかあり得なかった。昔日の巨匠に教わることは、真の芸術家ならば決してやめないであろう。一人立ちすればするほど、彼はいよいよ多くのものを彼らに負うことなるだろう。しかし、学ぶ途上にある者にとっては、昔日の巨匠を研究することは、彼が紛れもない根源的な制作の時代に生まれついていない、ということの穴埋めとはなり得ない。彼は、自分の姿勢が忠告と指導に憧れることでもって、かの死者たちの方へと向いていることに気づくのを、宿命のように感じざるを得ないであろう。こうした人たちと共に、こうした人たちの下で、自分の力を伸ばせることができたなら、どんなに自分のためになったことだろう。こういった人たちと、共に格闘する自由な競争に身を置くことができれば、目に見える世界から固有の造形表現を勝ち取ることが、身についたことであろう。だが、実のところ、彼は特定の完成作品の力の支配下にあり、しかも、この作品は結局のところ、彼にとってはいつまでたっても何事も語らず、謎めいたままなのである。知らず知らず、彼は自然との直接的な結びつきを失って、彼自身、到底匹敵し得ないものの模倣者となってしまう。いかに多くの人

が、そうした彼らの生み出した作品の全てにおいて、それらがたとえ完成度においてでなくとも、自主独立の点で、あの昔日の巨匠と競える何ものかを生み出せたということよりも、むしろそこに、その到達しがたい様々な手本を思い出してしまうことであろうか。現代美術には、手本を思い出させるこうした作品が、余りにも多いのである。マレーも、あのミュンヘン時代には、こうしたことから自由でなかった。この時期に生まれたもので、ミュンヘンのシャック伯爵のコレクションに収められているある作品には、当時の彼の勉強仲間によって保管されているあのスケッチと同様に、オランダ美術に対する愛着が認められる。とはいえ、これらの場合には、外国の手本への隷属ということは、問題にならない。ここには、表現可能な造形世界がまだ見出せていなかった程に強い自然感情が、顕著だからである。1860年ないし1861年に制作された、シルの死<sup>(1)</sup>を描いた一点の絵に言及すれば、この図はケルンで展覧会に出品されて、批評家から酷評を受けた、とのことである。マレーは、当時すでに、自分の作品の公的展示については例の強い調子の反感を抱いたらしいのだが、この反感は、彼の死まで彼の心を離れなかった。この絵がどうなったか、わたしは全く知らない。マレーがその純然たる芸術的努力において、かなり限定された対象表現の壁を突破しようとしたのを眼にすれば、それは、十分に注目すべきことであつたであろう。わたしが眼にすることができなかった、この時期の別の一つの作品は、メクレンブルク在住の個人の所蔵となつたということである。

一般的にいえば、マレーの活動の成果には、不運がつきまとい離れなかったが、これは偶然でなく、そもそも、マレーの最も良き性質に関わることであつた。彼の旺盛な制作意欲と著しく活発な精神活動からすれば、彼は大変に多くの作品を生み出してもいいはずであつたが、30年を超える活動の証はどこにあるのかと問う声が、うつろに響くばかりである。なにほどか彼の近くにいた者なら、彼が、為したことについては高邁な見解を持ちながらも、彼自身の成果には露程の愛着も見せず、この両者を結びつけなかったことに、気づいたことであろう。彼にとっては活動がすべてであつた。成果は彼にとっては一つの終点でなく、彼が進む道の一步でしかなかった。歩を進めたとすれば、もはや後ろは見ず、前を見た。彼が周囲を見回して目に留まったものは、彼にははなはだ職人的と映つた芸術活動であつた。それは、いかに多くの人たちが、生来の才能を磨き上げて熟練に達し、一生涯、常に同じ結果でもって、常に同じ表面的な芸術欲求を満たすことができることに満足している姿であつた。彼にとっては、芸術家の使命は、全く異なる光の下に現れた。彼は、芸術家としての自分には、他の人にとっては、いつまでたつても無縁なものに留まらざるを得ない自然との繋がりがあることを、自覚していた。彼は自らの活動の意味を、この繋がりがいよいよ豊かに、いっそうはっきりとしたものへと発展する点にのみ、認めることができた。いかなる成果も、彼にとっては単に一つの通過点でしかあり得ず、その成果の価値は、それが成立したことにあるのであつて、それがそこに存在することにあるのではなかつた。もし彼が、自分にとってはそのものの真の意義は過ぎ去ってしまったものをもとに、永続的な価値評価の対象を作り上げようとするのであれば、彼はそれを弱みと見なしたことであろう。

それゆえ、彼の作品にとっては、彼自身より、たちの悪い敵はあり得なかつたのである。彼は作品の保存についてはまるで考えなかつた。習作と素描はたまって、ぞんざいに床に置かれ、ついに処分されてしまうこともあつた。彼は幾度となく住まいを変えたが、その都度、いつでも、どこでも出来上がるようなものには大して注意も払わず、置き去りにした。ときおり、彼はなにがしかの作品を、気前よく、人に贈り物としてやってしまうことがあつた。しかし、自作の大半を彼はその運命の手に委ねたから、それらは散り散りになるか、それとも滅びてしまった。自作に関して無頓

着なことに加えて、これに関連して、彼には、いつでも自己の活動を人の役に立たせる用意があった。この場合でも彼は、余計なことは考えず、ただひたすら、ことの性質に寄せる関心で頭が一杯になった姿を見せ、夢中になれるという、類まれな能力を示した。すでに彼のミュンヘン時代、彼は、自分ではもうどうすることもできない連中から、助けを求められることが何度もあったし、よく知られていることだが、途方にくれて絶望している人がいると、いとも手早く、確かで、秀逸なる手術を行い、正しい処置を施したのであった。彼の仲間はちゃかして、彼のことを軍医殿と呼んでいたが、その訳は、やっかいな手術が必要なときは、必ず、彼が行かなければならなかったからであった。

ミュンヘン時代のマレーを知っていて、その後数年を経てローマで再び彼を眼にした人は、彼に起こった重大な変化に驚いたに違いない。1864年、イタリアに赴くべくミュンヘンを去ったが、比較的短期間の中断期間を除いて、彼は死ぬまでかの地イタリアに留まった。当時彼は、明らかに、十分な自立と自らの人生の課題をはっきりと掴むことを求めて努力する人なら、だれでもその身に味わわれる、かの内面の危機に、直面していた。まさにそうした時期に、故郷の生活環境を離れ、イタリアの地に足を踏み入れたことは、彼にとって決定的となった。彼はわが身が、突如、あたかも途方もない深淵によって、これまで自分を取り巻いていた芸術情勢から引き離されるのを覚えた。いまやはじめて彼は同時代のさまざまな努力に対して精神的自由を手に入れることができたし、以後の彼の活動の全てに、内容と価値を与えることになるもの全てが、いまやはじめて彼の内部で、何ものにも妨げられずに生長することができた。

イタリアへ出かける芸術家はかなりな数に上る。それで、こうした芸術家はこの地で、自分が属する時代や、自分が育った芸術的伝統の種々の偏見から断ち切られた思いになる。確かに、彼の使命ともいうべきより高次の課題も、このとき、彼の前に立ち現れるが、しかし、この洞察には驚かされる。こうした芸術家は、それを悪夢のように頭から振り払い、はなはだ多くの他者が成功と名声とを得ているのを自分の眼で見ている、より安定した地盤へと、逃げ戻る。彼がそこから得られる利益は、結局、彼がイタリアの自然と芸術のかけらを故郷へと持ち帰り、それを、自らの能力を役立てられるあらゆる奇妙な目的のために活用する、ということ以外にないのである。マレーにとっては、イタリア滞在はこれとは全く違う意味をもった。彼の若い頃の仲間は、彼に、すぐに成功するだろうと予言していた。ところがいまや彼の天賦の才能が陥っていた運命は、北方の芸術家にとっては、イタリア暮らしは、益するよりはむしろまさに害を与えるとする世間一般の考えを立証するものとして、多くの人たちによって引き合いに出された。彼らは語る。彼は故郷や時代と疎遠になっている。彼は自らの発展の自然な条件を見限り、時代の欲求と要求との関連を失うのは避けられない人為的な環境に身を置いている。彼は孤立している。そして自分を満足させることばかり考えているものだから、自作が、他の人の作品や母国の精神生活とどのような関係にあるのかを測る物差しを持たないのだ。現代の芸術家がイタリアに何を求め、この地で何を学べるというのだろうか。美の礼賛や、澄みきった形の世界が人々にながしかの関心を抱かせることができた時代は、永久に去ったのだ。人々はより真面目な課題にとりかかり、より深刻な問題に直面している。芸術作品においては、時代の精神的潮流への関与が、眼に見えるものとなる場合に限って、ながしかの意義が問題となり得るのだ。芸術家はただ母国にあってのみ、人を行動へと駆り立てるさまざまな生きる力に捕らえられ、そこでのみ、鍛えられて、自分にもひとかどの力があり、自分が得た感化を、



今度は、他の人へ影響を及ぼすことに用いることができるのだ、という意識をもてるようになるのだ。彼が自らの時代や母国に背を向けて、遠い過去の芸術や異国の自然へと逃げ込めば、必ずや罰を受ける。たしかに、彼の作品は、個人の才能が生み出した個々の産物と認められるであろう。だがそれは、時代によって成し遂げられる精神活動の全体像のなかに、不可欠で重要な構成要素として組み入れられるということは、決してないだろう、と。

以上は、高い視点の持ち主として自らを誇る人々が、大真面目に、また尊大に語ったものであるが、しかしこれは、事態を冷静に見ればたちまち大きな間違いだとわかる、かの皮相な真実のひとつである。自らに非凡な能力があると感じている者なら、誰も自ら進んで、必要もなく、外国や孤立の道へと追いやられないであろう。先の連中が誇りとし、またそれに役立たせるべく、彼らは彼らの言う逃亡者を呼び返すその国家的芸術が、仮に偉大な過去の芸術とただ僅かばかりでも内的類縁性を持つのであれば、不運にも、芸術的素質をもって現代に生まれついた人々も、どんなに仕合せに思うことであろう。だがここで、先の連中は知るか知らずか、大きな間違いを犯しているのである。彼らは、その当時、芸術はこれを取り巻く生活環境やこれが属する精神界の内容と密接に関連していたことを強調しているが、この点は正しい。しかし、彼らが、作り手に、芸術的とは全く異なる理由にもとづく重要で意味のある題材領域を指示したことから、然るべき事態になったのだと言うとき、それは誤りである。かの世紀の生産活動が他の時代のそれを凌ぐのは、かの世紀の作品には、当時の人々を感動させたものや当時の人々の関心事であったものが、数多く見かけられるからではない。かの世紀の生産活動が重要なのは、むしろ、それが、心ならずも結ばれる題材領域は別として、その活動そのものを、かの時代の精神的努力の本質をなす内容として描き出しているからなのである。その重要性は借り物の重要性などではない。それは根源的な重要性である。この点を認めることができるのは、あの表面的な繋がりを思い止まることができる人々のみである。それがいかなる内容に役立つとも、真の芸術実践は、いかなる場合も、常にただそれ自身の目標を追い求めることであろう。描写される題材領域の名において掲げられる様々な要求には頓着なく、結局、真の芸術実践が得ようとするものは、ただひとつ、およそ目に見える存在をますます明確で豊かな表現へと発展させることであろう。これがすなわち、かの創造の悦びに溢れた時代の根本特徴なのである。人々の心を捉える各種の問題とともに、造形の努力は、高じて、同等の権利を有する独立した意義を得るまでになったのである。余りにもしばしば思考や行為といった他の領域から先取りされることのあるもの、重要な多数の個人の力や、活動的で十分な理解力を備えた同時代人の関与といったことは、芸術にとって有益であった。芸術制作では、もはや単に任意の内容が間接的で不十分な描写を手に入れるというのではなく、むしろ芸術制作においては、ただ芸術においてのみ表現可能な、明確に限定された自然、および世界の内容が、直接的に顕現したのであった。

今日の芸術を、こうした芸術発展の最盛期のそれと比較しようとする暴挙について説明できるのは、過去に制作された記念碑的作品に内在する自然の意味が、ありとあらゆる間違った解釈にさらされ、誤解されている、という事情において他にない。当時の造形制作は自然な普遍的欲求にもとづくものであったが、今日の芸術は、時代がそれを無理にまとおうとしている借り物の衣装にたとえられる。あの時代に認められる、ただ造形活動のみが達成できるところの、直観から発展する自然との繋がりが、目に見える世界の豊かさや素晴らしさの究明といったことは、〔今日の〕鑑賞者や芸術家に、どれほどの関わりがあるというのか。自然主義の運動に見られるように、芸術はそれ自身の原則以外の何ものにも従わない、と唱える場合においてすら、その実、芸術は、あまりにも愚かなやり方で、科学という全く異なる分野に発する刺激に突き動かされている。今日の生活は(あ

の時代とは)全く異なる諸力の支配下にある。自立性や有力な影響力を欠いた芸術は動揺せざるを得ないし、内的真実に欠ける。というのは、芸術は外部からこれに求められる要求に応えるべく、絶えず自己を放棄するからである。芸術は自覚的に生に対抗して、芸術なりに、生を新たな内容で豊かなものにしようとするのでなく、むしろ自己を見失って生に埋没する。そして、芸術が独力では得られない関心と呼び起こすために、それを利用しようと、絶えず新しい、芸術とは本来無縁な関心が見つかりそうなところばかりに、目を向けるのである。生来の才能といっても、それが直接の自然表現を求めるところか、むしろ専門的教育を得て、ただありとあらゆる課題の描写手段をマスターするだけに終わるとすれば、何の役にも立たない。同時代の関心に没入してしまえば、待ち受けるのは、あらゆる芸術制作の根源的な意味を忘却することであった。公的生活に属す全芸術は、私的な名誉欲がかけめぐる運動場と化してしまった。これに反して、そこからのみ偽りのない成果が生じうる物静かで私情をはさまぬ名誉欲は、もはや失われたかに見える。豊かさを装ってはいるものの、今日の生産活動は不毛で画一的である。千差万別とはいえ、そこに見られるのは常に同じ芸当である。いかなる欲求であれ、描写や享受、娯楽を満たすのに、相も変わらず、習得された、もしくは借り物の、まるで不十分な形体言語でもってするということが起こるのは、そこに、自然に対する無関心があればこそ、である。

現代と偉大な過去との内的対立を認めることは、祖国からの自発的な国外退去という高い代償を払っても、得られるとは限らない。ところがマレーの場合はそうした対立を認めるどころか、それ以上となった。環境が変わって、彼には、現代の芸術行動の大うそからすっぱりと手を切る元気が出てきた。彼がこれを成し遂げ、そこから得られた信念を揺るぐことなく死ぬまで持ち続けたことは、彼の人生を思い描いてみたときに浮かぶ、本質的な特徴の一つである。彼は自分が、故郷を離れた土地にあって、過ぎ去った芸術最盛期の証左の下にあるのを覚えたとき、自分がその才能の全て、その努力の全てをもってしても、これまでは何も達成していなかったこと、いまや自らを語の真の意味における芸術家へと造り変え始めねばならぬことを、はじめて思い知らされた。彼はかの偉大な過去の作品から全く新しい教えを受け取った。それらはもはや彼には、かつてそうであったような、あらゆる生産活動にとって範例や手本とならざるを得ない個々の作品、とは映らなかった。彼はそれらを、それらが生まれた際の全体的関連において、また、それらが所属する地域の自然との大きな繋がりにおいて眺めた。いまやはじめて、それらの作品が彼には分かるような気がした。彼はそれらに、常に新たに求められ、常に新たな仕方で見いだされ、ますます高次の真実と完全性へと高められる、目に見える世界との繋がり、表現を認めたが、彼もわが身が、この目に見える世界との繋がり、に捉えられるのを感じた。彼が感嘆し、それを研究や模倣の対象にせねばならぬと思ったのは、個々の秀逸な点や完璧さでなかった。彼が身の回りに見たかの偉大な時代の記念碑的作品は、すべて彼に、次の点を考慮するように促した。すなわち、それは、目に見える自然の像を芸術的な造形表現において、明瞭で説得力のある存在へもたらすという、強い普遍的な要求が当時の人間精神を捉えていた、という点である。彼を没頭させた作品の作り手であるいかなる個々の巨匠も、いまや彼にとっては、もはや単なる一連の感嘆に値する創作物の作者でなかった。各個人の個性的な特質のなかに、彼は再び、先の普遍的な要求があるのを認めた。彼は個人が、普遍的な表現欲求に関与しつつ、自然に対して特殊な、その個人にのみ特有な関係を結び、この関係が、その個人の造形活動のなかで発展して、個々の作品においてその優れて明瞭で、極めて高度な表現にまで高められるのを、見た。

マレーの活動には、不本意ながらも、停滞が生じざるを得なかった。彼は、誰でも普通、最初の

いくつかの幻想が潰える年齢に達していた。彼は自らの才能に自信をもち、望みとする人生での勝利は容易く得られると考えていたが、いまや彼は、為すべき事柄をよく検討して、支配的な信念や世間に認められた業績に刃向かうたちの人間は、途方もない苦勞に耐え、また人生を棒に振る気構えが必要なことを悟った。彼の心の奥にある、世間に対する信念がいかに困難な立場を彼に割り当てるものか、が明らかになったその瞬間、同時に彼は、自らの課題に立ち向かうには、まずこれからは、自力で、ひとかどの仕事をしなければならぬことを理解した。彼は自分が見るところ、まだ何物でもなく、また何事もなし得ていないという、恥ずべき結論に達する他はなかった。そもそも、彼が思いがけない才能を、その時々、脈絡もなしに発揮したことで、無能や凡庸な才能をたやすく打ち負かしていたことに、どれ程の意味があったのであろうか。ともあれ、その故郷の地において、彼らの十分な重要性がいまやはじめて、彼に理解できるものとなったかの人々と、わが身を較べてみたとき、彼には、秤にかけるだけの何物も、持ち合わせていなかった。ところが同時に、彼が足を踏み入れたその素晴らしき大地は、彼に強烈この上ない刺激を与えずにはおかなかった。彼のこれ以後の活動の全てから見れば、彼がイタリアに赴かざるを得なかったのは、目に見える世界に対して、一本筋の通った強い結びつきを得ようとするためであったことがわかる。とはいえ、彼のこれまでの作品は、芸術表現の欲求が、自然との一時的な関係に入り得る地点を、探し求めていることだけは示していた。以後の全てにおいては、この比類のない個性によってのみ自然から得られることとなった、造形世界の発展が、認められる。マレーが思い知ったのは、彼にとっては、この地イタリアにおいてはじめて、彼が受け取る外側からの刺激と、彼の本性をなす最も深い資質とに基づいて、それを表現すれば、語の偽りのない、すぐれた意味における芸術家になれるという世界が生まれるのだ、ということであった。

当時のマレーにあっては、感動的な認識の瞬間と、深い落胆とが交互に訪れたのであろう。わが身に芸術家としての再生を味わうという喜びに、かなりの量の苦汁が混じるのは避けられなかった。ともかく、彼は、生まれた時代に縛られていたのだから仕方がなかった。ただ彼が、どんなに彼の天性を発揮してもひとりきりだということを、至るところで思い知らされたのは、歴然としていた。彼の思いでは、極めて力強い〔芸術家としての〕復活が生じていたのであったが、しかし、まだ確固たる足場を築くだけの基盤を見出せていなかったから、つらく苦しい不安定の中に身をおくよりほかになかった。彼が当時味わったであろう内面の葛藤にまで、目を向ける人はいなかったのだろう。この時期に書かれた可能性のある注目すべき書簡の一節がわたしの手元にある。匿名の友人に宛て、マレーが綴ったものである。

「長らく御無沙汰しています。かねがね近況をお伝えしたいとは思いますが、この間ずっと気分がすぐれず、わたし一個の存在そのものが疑念にとりつかれてひどく揺れ動いていたものですから、あなたには、このような心がちぎに乱れた暮らしのみじめな光景をお見せすることはすまいと思った次第です。わたしはまるで永遠にさすらうユダヤ人のように、安らぎも憩いもなくさまよっています。たとえ、足を使ってというのでなく、精神的に、ということであるにせよ。一人前の男になれ、働け、そして制作に没頭せよ、と何度わたしは自分に言ったことでしょうか。たしかに、これは言うに易しく行に難いことです。汝、望みさえすればよいのだ、さすれば山をもひっくり返すであろう、とわたしに言ってくれた人もかなりいました。望まない人なんていません。自分の望みが何かを知れば、事の半ばは成し遂げられたも同然です。望みはあるのだが、その望みが何であるかが分かっていない。こうして、あなたに対して、わたしの不安な心からどうにかいま引き出



せる告白も、この点に掛かっているのです。あなたの方が当然の権利のようにより多く抱いてくれている信頼が、わたしには欠けているということで、わたしがあなたから非難されても致し方ありません。ああ、とても深い悲しみがしばしばわたしを襲う事は隠しようもありませんし、わたしの歩み始めはいかに鮮やかで、大胆、率直であったことが思い出されます。わたしは自分を生来の壊し屋だと思い、率直さと揺るぎない判断とによって、真理への道を突き進むつもりでした。時はいつの時代でもそうであるように、前へ前へと疾走しますが、しかし今日の人間は、その時間を上回ろうとしています。それはこれまでだれも見たことがなかった、今日から明日へと猛スピードで駆けてゆく姿です。歩行が不自由な、あわれなわたしはついていけませんし、もう長らく立ち止まったままです。いや、もしかすると、這って後ろへさがっているかも知れません。しかし、何のためにこんなにひどく急ぎ、世の全ての人々は一体どこへ行こうとしているのでしょうか。わたしにはわかりません。しかし思うに、結局人々は、とにかく急いだことによって、認められた期限を自分たちの力で十倍も縮めたことがわかるのでしょうか。ああ、もうわたしには分かります、わたしが何を望んでいるかが。わたしは生きたいのです。わたしは人生を神の賜り物として見たい(実際またその通りですが)。それに価値を認め、それを大切に扱いたいのです。それはわたしにはなんといっても仕事の上の尽きぬ泉ですし、いかなる新たな一刻も、この貴重な賜り物の知られざる側面をわたしに見せてくれます。ただ問題は、いかにこの人生を始めるかです。わたしは予言者ではありませんし、何が起こるかを前もって言うことはできません。また、未知の要素がわたしの行動にどのような影響を及ぼすことになるのか、わたしには見当が付きません。しかし、やりたくないことを決めることはできます。その上、過去と経験があるのです。経験はさらにわたしに、そのときわたしが身を清め、解放されて、女神への務めに身を捧げることができるようにと、聖務日課の各時課の祈りを唱えることを許すのです。

またもや一日が過ぎ、たとえ無駄な一日でなかったとしても、しかしまたまたそれは、人間の決意がいかに微々たるものかを示しました。われわれが決意したその次の瞬間には、すでにわれわれはまたもや、それに反しているのです。この地球が、毎日光に向いてはその後再び光に背を向けるのとちょうど同じく、人間も、たえず善から悪へと永遠に循環しているのです。一体人間には、自分が見ている光を、変わらぬ明白さのままに見るといふことは決して許されないことなのでしょうか。昼は夜に席を譲るためにだけあるのでしょうか。

たしかに、われわれの過ち、欠点、弱みは多種多様で甚だしく、これもわれわれは払いのけることはできないかもしれないということを、わたしは信じて疑いません。しかし、それにもかかわらず、誠実な努力を払って、少しばかりの善を獲得せねばならないと思うのです。せめてわずかばかりの善さえあれば、偽りのない正しき大地に幾千倍もの実を結ぶのには、十分です。」<sup>(2)</sup>

マレーは奮起して制作に取りかかっていたいなければ、彼の人生を決したあの危機にともなう精神的動揺に、負けていたに違いない。彼は全力を挙げて制作に励んだ。イタリア入国後に続いたのは、多年にわたる孤独な制作であったが、新たに獲得された理想の発展が、このとき見られた。そしていまや、彼にとって、最高の目標を目指す彼の意欲と、不十分な彼の能力との間の真の悲劇的な葛藤、闘いが、始まったのである。この内なる敵に彼は決して打ち勝つことはなかった。彼の課題が大きく彼の目の前に現われ始めたとき、彼はすでに、自分はこの課題を実現し得るのだろうか、不安を覚えざるを得なかった。彼には自分に対する信頼や不屈の精神、この一つの目標のために全



てを犠牲にする勇気が、欠けていた。だがそれにしても、この洞察は遅すぎたのではなかったか。彼には、間違った教育課程に従い、好意的な理解でなく、反論や抵抗しか当てにすることができなかったという事情から派生した、内外のさまざまな困難を克服するだけの力があつたのであろうか。彼は、自分の周りで起こっている事は氣にとめず、ただひたすら自己自身を満足させることに努力し、そして、事実、自己の絶えざる前進を、明瞭で完璧な作品に表現し得る才能がある、あの恵まれた人々の中のひとりであろうか。それとも、彼は、何の制約も受けずに自らの手で居場所を造り出すことができ、また、誤謬や凡庸、無関心といった根強い抵抗に対する闘いの中で、力を増してゆくように見える、あの偉大な天分の持ち主の中に属するのであろうか。もし彼がその生涯をかけた作品を実現すべく、自己自身について、また彼の意のままになった手段について、自らに釈明したとすれば、彼はおそらく何度も絶望的な気持ちで、やむなく、自分が勝ち目のない闘いを始めたことを認めたことであろう。結局、彼自身にもまして、他の誰が、芸術形成の過程が明瞭で説得力のある終結を見るよりもはるか以前に、必ずや彼の作品を失敗へと導く要因となる、内的障害に気づき得たのであろうか。彼はより高次の洞察を自覚して、世の抵抗に立ち向かわざるを得なかったが、しかし、彼には、この抵抗を打ち破るだけの力がなかった。彼は自らの才能の不足に対する闘いに疲れはててしまった。それゆえ、頑張れば、外に向けられた闘いが、自由の身を約束する結末を迎えるはずの地点で、彼が眼にしたのは、わが身が自己自身へと撤退する姿であった。彼は正当にも、本質的な事柄においては、手本と仰ぐ人々とも競えることを自覚していた。彼は自らの努力が、同時代の人々の邪道な振る舞いに優ることを知っていたし、彼は自らが、偉大な正真正銘の芸術の王国の一員であると感じていた。しかし、それにもかかわらず、彼にはなはだ多くのものを与えていた自然は、彼を、繰り返しこの王国の戸口から追い払ったのであった。これがため、彼の運命は悲劇的なものとならざるを得なかった。

このような長年にわたる彼のたゆまぬ制作の歩みを、ただなにがしかでも迎えることができた人なら、彼の手になる数々の造形物の豊かさに瞠目したに違いない。見事な想像力の世界が急に開け、創意溢れる画像が次から次へと現れた。そしてこれら全てが消えて無くなるのを、人は眼にしたのである。これら全ての創造物を、いとも容易く明るみへともたらしたその同じ手によって、次第にその明瞭さが消え、暗くなっていっていった。それらの創造物はますます完成に近づくどころか、いよいよ完成から遠ざかるように見えた。それら創造物の作者はそれらを捨て、新たな構想において変わりばえのしない遊びを、またまた新たに繰り返そうとした。彼は深刻な内面の分裂に苦しまねばならなかった。最終的な成就への固い信頼の念は、常に新たな活動へと高まる力を彼に与えたが、しかしその都度、彼は、自己への信頼の念が崩れてゆくのを眼にした。こうした分裂は、彼がイタリアではじめて自己の芸術的使命を十分に自覚したときから、彼が没するときまで、彼の存在を支配した。彼の人生の真の秘密はこの点にこそあつたのである。こうした時の流れに彼に近づいた者は多いし、彼のすぐれた人格や、触発を与えることが多い彼との交わりから、永続的な影響を受けた人は数多くいる。多くの者は彼の性格の類まれな特質に、その豊かで多方面にわたる天分に悦びを覚えたのである。だがしかし、彼の人生のかの最も深い奥底にまで達した者だけが、彼の内面に近づきえたことを誇ってもよいであろう。晩年近くになると、彼はしばしば嘆きをもらして、生来、はなはだ陽気で、生を享受するようできているこの自分こそが、不満をもらし、世をあきらめた者の役割を演じるという運命にあるようだ、と語った。彼をよく知っていた者ならだれでも、経験的に、彼がすすんでとても陽気な気分を謳歌し、大はしゃぎのばか騒ぎも拒まない、ということを知っていた。とはいえ、彼らは、愉快で生を楽しむことがこの人物の基調を成すものではないこと

を、ひとときたりとも忘れたわけではなかった。彼らの眼に頻繁に露になったのは、深刻な様子と、過酷な運命の重みであった。

マレーは自らの内面の営みについて語るということにあまり乗り気でなかったものの、しかし、ときおり彼の書簡には、彼が直面していた精神的葛藤に目を向けさせる表明が、現われる。以下にお目にかかるのはそうした一連の書簡の一節であるが、それらの書簡が書かれた時期は長年にわたるものであって、その訴えかけるところは、他人が費やす凡百の言葉よりも衝撃的である。

「わたしの人とは違った風に見える暮らしぶりには、おそらく、あれやこれやの弁解も考えられるだろう。まずわたしは実際、生死をかけた不断の闘いのさなかにあり、わたしは死ぬまでこの闘いを続ける気だし、そうせざるを得ない。またおそらくそれが可能だとも思っている。外面的な不機嫌について語ることは、それを十分にもち合わせているとしても、わたしの流儀に反する。しかし、内面の仕上げを阻む最大の敵はわたし自身にあることは、隠しようがない。この何年も、敏感に、神経質に、過敏に反応して、わたしは感激、自己信頼、確信、悲観視、そして絶望の間を、たえず行ったり来たりした。安全な港に入るには、わたしはこうしたことはすべて控え目にしなくてはならないし、事実、この方面では進歩があったと思う。最善をつくし(むろんここで言うのは、わたしの力量を超えたものではなく、わたしの力量の全てということである。)、そして自己欺瞞に陥らずにことを行い得るには、たえず全力を発揮することと、たえず最善のものについてのイメージを持ち続けることが必要だ、ということはそのとおりである。洞察に通じる道はあるものの、その歩みは、困難を伴う。もちろん、わたしには、わたしが自分の努力をはるかに超え出て、自然な現実を見失ってしまったと、不当に非難されるいわれはない。わたしには弁解の余地はないが、かといって、この自分の歩みを変えることもできない。後戻りを考えるつもりもないし、またそんなことは考えられない。死ぬことになるぞと脅かされても、わたしの態度が変わることはあり得ない。しかしその結果については、一人の男として、甘んじてそれを引き受けようと思う。そしていささかなりとも、わたしの望みが達成されるなら、そのことで、わたしもまた両足でしっかりとこの現実に歩を占めており、情緒的な夢想家でないことが、はっきりとするのだ。わたしには「もう少しのところ」[ 'fast' ] という小辞を消すことができるはずだし、そうなればそれだけで、すでに何ほどかを得ることになるのだ。そのために必要な確固不動の信念をわたしは持っている。気力は高まり、衰えることはない。と同時に、いささか価値のあるのは、わたしの健康である。わたしには何にもまして孤独を愛するときがある。というも、この孤独の時にこそ、わたしは心を分かち合える人たちと一番よくつきあえるからだ。密接に絡まる記憶と想像力は、このとき、活発になる。真の生産活動は体験し、経験したもののエキスなのだ。これを成し遂げられる人はこの短い人生にあって、悪くないことだが、二度生きるのであり、またそれをきわめて優れた能力でもって、しかも一般にわかりやすい仕方で成し遂げる人は、その作品のなかに生き永らえるのだ。」<sup>(3)</sup>

「わたしの幻想については、あなたはよくご存じです。それはごく若い頃から周囲のものや自己自身、また生計との困難な闘いであって、外面的には非情に見えるものの、なおも充分感じやすい心をもったひとりの人間が、いだけ幻想なのです。」<sup>(4)</sup>

「そしてわたしが、手で掴めるような現実の世界に安んじてなじむようになればわたしの活動も、見事な成功をおさめることだろう。野心からでなく、まさにいわば素直な心がそう望むように。」<sup>(5)</sup>

「確かに、また、問題となるのは、世間から名誉回復を勝ち取るのではなく、どれだけ多く自分自身を満足させるか、ということである。」<sup>(6)</sup>

「やはり気力だ。これこそがどんな意気消沈にも効くのだ。もはや自分の努力が功を奏さず、どうにもならなくなれば、そのときはじめて、わたしは自らこの暮らしにいとまを告げるであろう。もちろん、信じられないくらいまでに、ねばり強く事を行うことができねばならない。そうでなければ、高い目標をねらうに値しないであろう。またそうしてこそ、不可能と思えたことが可能になるのだ。だがわたしの運命なんか、僅かな真友や年老いた父を除けば、誰にとってもどうでもよかったのだし、いずれわたしのことは困ったことにしかならない。だとしても、所詮はわたしひとりのことだから、せめてもそれが大きな慰めだ。」<sup>(7)</sup>

「過去の結果を克服し、抹消することはわたしにはむずかしい。しかし、わたしの場合、唯一の未来の可能性はその点に掛かっているのだ。」<sup>(8)</sup>

「君がM.について書いていることを読んで、大変うれしく思います。わたしは世間の意向どおりに事を行わないあらゆるひとに対してと同じく、彼に対しても、うまく成功すればよいことを願っています。世間や社会、いやそれをどう呼ぼうとも、なんとかこれを乗り越えようとする者がいれば、世間は容赦しません。不幸にもそうする人はただではすまないのです。どの人にも認められる彼の弱みのどれ一つとして、彼を罰する材料となるのです。しかし、あらゆる過ちを償い永續する美点は、(それがどれほど小さなものであっても)認められるのは実に稀なことで、しかも、認められるまでにずいぶん時間がかかるのです。」<sup>(9)</sup>

「時代は悪く、美術はいよいよ沈滞化しています。しかも美術のよりよい未来のための希望は、残念ながら、殆ど唯一、次の点に、つまり、美術は今日の墮落した趣味と子供じみたディレクタンティズムのせいで、完全な窒息状態にある、という点にしか見いだせないのです。あまりにもはびこってしまった雑草のために、健全な芽は覆い隠され、育つことができないのです。

外界との没交渉はもちろん気力をなくさせるには充分ですし、活動力の低下をきたします。繰り返し新たに勇猛果敢な昂揚が必要になりますが、たちのよくない大理石が繰り返し現れてきます。このような状況にあって、考えを同じくする者どうしが助け合い支え合おうとしなければ、不運はいよいよ大きくなるでしょうし、絶望的な状態になりかねないのです。それでいて、残念なことながら、こうした見方も、ごく僅かな人の間にしか浸透していないのです。」<sup>(10)</sup>

つかの間ドイツに滞在したときに、彼は書き送っている。

「これまでドイツで眼にした全てのものがいかにわたしの気分を害したことが、言う言葉がありません。まじかにみれば、人々の行いはいかにあさましく、また、彼らの考えと努力の全てがいかに狭隘で、そしてまた、ある耐え難い状態から別の耐え難い状態へ移るのに、なんとせわしく急ぐことでしょうか。われわれを取り巻くこうした慌ただしさに対抗するには、いっそう多くの休息と忍耐が必要です。また、こうした忙しい手合いには、幻を追い求めるというのではなく、共感〔Sympathie 感情の共有〕こそ、人が得られる唯一確かな財産なのだということを知るとき、優位に立てるのです。」<sup>(11)</sup>

同じくドイツから。

「この地郷里にいて思うのは、わたしには郷里がない、ということばかりです。かなりの勇気とおそれを知らぬ大胆さこそ、わたしがあえて自分の職業という船に新たに乗り込む際の元手なのです。」<sup>(12)</sup>

再びローマから。

「あなたの手紙のおかげで、志をいよいよ純粹に、気高くありたいというわたしの決心は強められました。すべてはまさにその点にかかっています。というのも、志こそ人間の行いを導くものであり、志においてこそ、ひとは真に完全なものになれるからです。取るに足りないこのわたしですが、少なくとも自分の力がたえずこの側面へと集中しようとしていることだけはわかっています。もっともそうはいつでも、わたし自身の外的境遇がこの道へと、繰り返しわたしを追い込むのですが。せめても芸術家魂らしきものに達するために、いかに苦勞して、無能な亜流と思慮のない名人気質との間をかき分けて進まねばならないことか。またおよそ言うに値するだけの人の殆ど全てが、あちらへいったかと思えばまた別のところへ移るといったように、揺れているのを見かけます。」<sup>(13)</sup>

「・・・わたしには、いかなる悲劇的狀態をも、繰り返し常に乗り越えさせる何ものかがあります。そしてこの何ものかとは、現象の王国に対するわたしの直接的な結びつきにほかなりません。別言すれば、それをどう呼ぼうと、制作における神的なるものの、理解というのでなければその不断の感受ないし予感、がこれです。それゆえにわたしも、たとえ世間の全ての人が首を縦に振らないとしても、騒がず、辛抱強く、わが道を行くことができるのです。またわたしには、人がこの追究に、いつの日かその全生活を捧げることも、やりがいのあることだと思えます。このとき、時代が好都合であるか否かはもはや全く問題ではありません。そうしたとき、最後に得られる成果は見当つきませんが、それは大騒ぎするようなものでなく、手堅く、影響力の大きいものとなるでしょう。要するに、わたしには最終的な目標が目に見えます。この目標にどれほど離れていようとも、それは問題ではありません。当面、問題はこの目標に到達することではなくて、これに近づくこと、いや、この目標へ向かおうとする真面目な意志を持つことだけで十分です。

自然は、最も強い印象を与える場合でも、仔細に見れば、ごく慎ましく現れます。(自然は常に慎ましい。ハムレット。)それでいて、それはごく些細なものの場合でも、全力をもって、ことを進めるのです。

こうした二つのことをわきまえる人なら、わたしのことも正当に評価してくれ、自然がわたしに与える示唆にあらゆる仕方で従おうとするわたしの努力が、いかに正しいものであるかを認めてくれるでしょう。

実際わたしは、自分の才能を見せつけるような努力はしていない。しかし、現有資本を維持し、できるだけ利得を付けて残すことは義務だと考えています。もちろんそれは、そんなに簡単なことではありません。いま通用している支配的なものを決して当てにできないのだから、なおさらです。いや、そうしたもののことを考えるだけでも、絶対的な時間の無駄と見るべきです。これより深い洞察にはわたしは無条件に頭を下げます。というのは、わたしには、より喜ばしい、より安心できるものに出あうほかに、こうしたものを思い描くことはできないからです。殆どどこでも出くわすものは、残念なことながら、それに反応を示すことだけでも恥ずかしくなるような、つまらぬどう



でもよいことばかりです。」<sup>(14)</sup>

「常に沈黙は金であるか、ということには疑わしさが残ります。

しかし、それにもかかわらず、それでもって、少なくとも、他のものにもまして静かだといえる芸術実践に必要な、心の平静の獲得が進む、と思われます。

もちろんわたしは、自分の努力が、わたしを騒がしく混乱した現代生活からますます遠ざけてくれるだろうことを、確信しています。しかし、これだけではまだ足りないのです。いつか再びひとが人々と心をつなげる時がくるとしても、人々が本来自然な、健全な人間悟性の何たるかをどうしてもわかろうとしないさまを目にすれば、そのひとには、軽い絶望感<sup>(15)</sup>が襲ってきます。ときにわたしは、自分の意見をつつみかくさず言うてしまうことに腹立たしい思いをしますが、一時的な成功すらおぼつかないものが、狂気の沙汰として世に現れてくるのを知っているだけに、なおさら腹が立つのです。我慢、我慢の毎日です。」<sup>(16)</sup>

「わたしが生まれつきの芸術家というのは、自然が生来そのひとの魂に理想を植え付けたひとのことです。そしてこの理想こそ、そのひとにとっては真理の代わりとなるものであって、彼はこれを絶対的に信じるのです。そしてこの理想を他の人の目に見えるものにし、自分自身を曇りなき純粹意識へともたらすことが、そのひとの生涯の使命となるのです。理想という言葉、これはまたいろいろと誤解されるおそれのある言葉のひとつです。造形芸術家としてのわたしがこれについて言うのは、まず、造形芸術家にとっては、眼に入るすべてのものは、その十全さ、その価値において、また、くめども尽きぬものとして、現れるということにその本質がある、ということです。こうして、彼の精神の方向性はすでに早くから決まるのです。それに応じて、これに必要な諸特性、たとえば観想性、模倣衝動、技能なども、その発達は早いのです。

わたしが5歳のとき、世界がどのように見えたら、そしてそのときの印象をわたしがすぐに簡単な絵でどのように表そうとしたかを、いまだにかなりはっきりと覚えています。さまざまな妨害も、このときから始まったのでした。というのは、殆ど注意を呼ばないことですが、たとえ善意から発したことだとはいえ、大抵の場合、個人と啓示との間の壁として立ち現れる、人からの影響も、このときから始まるからです。」<sup>(17)</sup>

「わたしは自分の生活信条に忠実でありたいと思っています。ひとが言うように、たとえわたしがこの信条がもとで身を滅ぼすことになろうとも、断固、旗を死守します。しかし、自分の信条がもとで身を滅ぼすなんて思っていません。むしろ、わたしの態度そのものが正当化されると思っています。わたしの能力はまだ活用されていません。逆にそれは自然な出発点を切望しているのです。そして至る所で妨害が雨後の竹の子のように起こるとしても、最後には乗り越えます。また、わたしの思い違いでなければ、絶え間のない闘いのおかげで、実際的な見方というものも、いささか手に入れました。わたしの目標はどこでも見かけられるという代物ではありませんし、おそらくは不十分なわたし一個の人間にとどまらない広がりをもったものです。他の人をもわたしの努力に引き入れることは、必須のことだから、わたしにできるでしょう。またわたしには、人間本性が許す限りでの自らのある種の無私を自覚すればする程、こうしたことをわが身に引き受ける勇気が湧いてくるのです。おそらくわたし自身の言動がきっかけとなって、わたしは比較的親しい人々の間でも、何度も誤解を受けたけれども、たしかにひとが生きる目的とする全てのことは、曇りなく明ら

かにされる必要があるし、明らかになります。しばしば疲れ果てて力が尽き、ひとがしたことが何の結果ももたらさない、ということは避けられないとしても、機会次第でかなり大きなエネルギーとなり、力の発揮へと至るのです。そして過ちを犯すことについては、芸術と人生において、このような過ちに無縁なひとがいるのでしょうか。結論は動きません。ゆっくりとした動きであれ、それは上と前を目指して進んでいるのです。」<sup>(18)</sup>

「結果である美術作品が感覚に対して完全に心を開くのに、どのくらいの時間がかかるのかを、よくよく考えてみれば、それに応じてわたしが、感じ取られたものや認識されたものが完全に心から離れるに要する時間に対して、怖じけづく度合いは、少なくなるのです。」<sup>(19)</sup>

「わたしの場合、自らの運命のなせる業で、いかなる美術的段階にも、身重の女性の場合と同様に、大変に大きな肉体的な不快感を、いやとときに、苦痛を、伴うということがあります。それでこのところ、わたしは実に不快な状態にあって、これがために、自然が新たにみずみずしくわたしに近づいたと思えないときには、殆ど人生がいやになった程です。結局、美術作品もまた、日暮れの夕日のように、人生において心を静めるものでなくてはなりません。わたしはこれを達成しようと思いますが、しかし、出来合いのもので済ますわけにはいきませんから、わたしは地歩を一步一步と固めなくてはならないのです。」<sup>(20)</sup>

「これまでのところ、人知れずひそかに自分の力を発揮し、自分の経験を多面的に豊かにすることは、最善の方法であったかもしれません。これからもそうであり続けるとしても、しかし、そのやり方は、いずれエネルギーの浪費や意欲の衰退につながるにちがひありません。芸術実践の最大の敵は空理空論であるのは変わらぬ事実であるとしても、しかし、作品制作への外的きっかけがなければ、いつもこれに頼らざるを得ません。場と機会についての一定の要求についてはある程度まで満足できるとしても、ただ天地創造の御業との力比べの点では、ひとは永遠に自分に才能がないことを痛感させられますし、自らの行いを退ける他はありません。」<sup>(21)</sup>

「わたしは、自らの意図を近似的にもはっきりと表現し得るのはまだだとしても、部分的に力のこもった作品を眼にしていることを十分承知しています。そして実際、この状態に満足しています。ふだん、恐るべき孤独にある者に、生きる喜びと力を与えてくれるものといえ、他に何かあるでしょうか。・・・」<sup>(22)</sup>

「わたしは喜んでこれに(艱難辛苦)堪えるつもりだ。私自身、長年、そこを巡ってきた、一群の不幸な者を取り巻く周縁部分を、ついに突破できるというのなら。」<sup>(23)</sup>

「私について言えば、いささかシロッコの影響があることを別にすれば、私の努力に対して、実際その通りなのだが、もうきっぱりとやめてしまったらどうかと、自分に不満の言える筋合いではありません。ついに、誤りの迷路を抜け出し、誰も私に不満を言えない状態になれば、どんなにいいことでしょうか。ごく単純そうな、限られた、ささやかな成果を手に入れるのに、大げさになったり、回り道をしたりすれば、たしかに、物笑いの種になることは必定です。実際、運命には逆らえないのだから、我慢が肝腎です。」<sup>(24)</sup>

「繰り返し目の前には霧がかかる。いつかきっぱりと永久に消えて欲しいものだ。今日、ひとびとには明敏な悟性の眼があるかと思えば天与の靈感に欠けるし、またその逆も起こる。要するに、真の芸術家は、それ自身、まず、自然の所産なのであって、それがため、そのような芸術家は、はなはだ稀なのだ。」<sup>(25)</sup>

マレーは普通、周囲の者との個人的なつきあいの中では、こうした腹藏なく思いを伝える稀な機会の場合とはまた別の、違った姿を見せた。彼は親しい友人に対しても、自らの芸術的意図の成就に対する絶対的な自信の程を誇示した。長年にわたるたゆみない、我を忘れた格闘と努力は、その最後の輝かしい勝利に対する揺るぎない確信に支えられているかに見えた。彼の心は、自分が取り扱う事柄に対する盤石の信頼の念に、また、歩みだした道は間違いなく正しいものであり、長らく準備し、入念に練り上げたものは、最後には、啓示の如きものとなるのだ、という信念に満ちているかに見えた。その人となりから発する力にははなはだ強いものがあつたので、人が彼に認めるそうした信念は、強烈な力を帯びて、周囲の者に影響を与えた。この類稀な男に近づくものは、彼の作品のなにがしかもまだ眼にしていなくとも、そうした力に捕らえられた。彼の晩年に至るまで、絶えず新たに、比較的若い美術家たちが彼に接触し、従つたが、彼らが受け入れたのは、彼のよく考えられたものの見方であつた。とはいえ、彼らはそこに、奇妙にも、自分では世間一般に通用する大きな影響力を持っていると思ひ込んでいるものの、その実、孤独な身に追いやられてしまった一人の才能ある人物の出現が認められることを、怪訝に思わなかつた。彼らは、そこでは、困難な道を歩み、高い目標を掲げる者には、長期にわたる時間が必要なのだということを知つて、満足した。彼らは忍耐強く待ち、目標達成の時が来ることを、一瞬たりとも疑わなかつた。そしてまた、彼らは、この画家その人の口から完成だという声が聞けるあかつきには、その作品は、すでにその作り手が彼を取り巻く周囲の人々に対して及ぼしていたあの説得力と同じ説得力でもって、必ずや全ての人々に感銘を与えるものとなるに違いないことも、信じて疑わなかつた。

もとより、マレーをよく知っていた者には、彼が見せつけた自信たっぷりな振る舞いは、格別な意味を帯びた。元来それは、他人の余計な出しゃばりに対する防衛であつたのだが、次第に、自己の職務への疑念に対する防衛へと、変わっていった。マレーは自己欺瞞という手段に訴えなければ、どのようにしてあの、力不足の闘いという意識に耐えられたことであろうか。彼は他の者たちに、彼が実際、彼らの目に映るとおりの人間であると納得させることに成功したように、今度はまた、自分自身を信じ込むことにも成功したのである。彼にあっては、自分では、その本性の実際的な達成能力がどの時点で活動を停止し、どこからが、彼に達成可能なもの、及び達成し得たものについての幻想であるか、ということについての確かな判断を下し得ないように思われたことも、よく見られたのである。作品そのものを前にして、このことが露見したのは、きわめて注目すべきことである。確かに彼は、長年、アトリエに人を寄せつけず、親しい友人に対しても、制作活動を覗かせなかつた。だが、そう親しくない人にも、アトリエの戸を開く時がやってきた。それなのに、實際眼にするものと、マレーの口から聞けることを合わせても、次第に、すばらしい印象が広がったことは、まことに、類のないことであつた。その二つのことを区別することは、出来なかつた。絵には、未完成なもの、過度のもの、ひどく恣意的な点が存在したが、それらはきれいに消えてなくなり、人は、完成したものばかりを眼にしているのだと、信じた。マレーは類い稀な雄弁でもって、實際、人が眼にしているものを、彼が得ようと努力してきたその当のものだと、述べ立てることが

出来た。人は彼から、しばしば風変わりで見慣れない姿から、彼の想像力のなせるすばらしい造形物が作り出されるさまを、教わるばかりではなかった。また、彼の言葉によって、眼には隠しようのない未完成の要素から遠ざけられたのである。彼の話の印象が強く、眼の実体験を上回って未完成の要素を拭い去ってしまうものだから、人は実に奇妙な錯誤に陥り、言葉で巧みに述べられたものを、視覚的に存在するものの中に、そのとおりに、眼に見えるものとして所有する、と思い込んだのである。

そのような時、マレーが、次の点をどこまでも信じて疑わなかったとすることに、疑問の余地はない。つまり、はなはだ豊かに、また心に訴えかけるように、言語表現を駆使し得たその当のものについて、自分は、造形上も、完璧な表現を達成し得たのだ、とする点である。彼が人々の中に引き起こした錯誤に、彼自身が陥っていたのだ。彼は自己の無力、というあの苦悩に充ちた意識を力づくで抑え込み、自分自身に向かって、その作品の出来からして作り手の名が偉大な芸術家の名の列に連なることになる、非の打ち所のない画家として、振る舞った。

マレーと親しくしていた人々は、このような特異な事象を前にして、真の友人の義務という掟を必ずしも完全に果たせたわけではなかった。実際、彼らも次第に、この、奮起して絶えず新たな制作に取り組む者に言わせれば、自らの才能をもってすれば達成し得ないことは何もないとする、その生来の才能の限界に、気付くようになっていたのである。彼らが目にしたのは、一人の才能ある人間が、彼らの目から見てもはや克服しがたいことが明らかな困難に、超人的に立ち向かっているさまであった。彼らはもはや思い違いの仕様もなく、この困難との格闘に最後の輝かしい勝利をおさめるなんて幻だと信じた。驚きと感嘆の念で、そしてまた憂慮の念をもって、彼らはその友人が危うい人生行路にあるのを認めた。彼はいつも自分自身を、その肉体的、物質的、社会的存在を危険に陥れる覚悟で、自己の高邁な目標を目指す険しい坂道を登っていたが、そのとき、彼が頼りとしたものは、自己の力に対する揺るぎない信念以外の何ものでもなく、この力をもってすれば、内外のあらゆる障害を乗り越えることができるはずだ、と信じたのである。彼にかかわる者は、何の実も結ばない無駄な試みを何度も繰り返した後で、自己錯誤の力が衰え、この生命からなる建造物を支えてきた支柱が突然倒壊する瞬間が来るのを、ひどく恐れた。

彼を錯誤の呪縛から解放し、より危険の少ない道に彼を引き戻す試みをする時間的余裕がまだある限り、友人の目を開かせ、真実を伝えることは、きわめて聖なる友人の義務と見なす必要はなかったであろうか。いや、実際、将来のための希望に充ちた企てが繰り返し失敗するのを防ぐために、なにがしかの実践的・技術的助言を聞き入れることがもう充分必要な段階に達していたのだ。彼には、慎み深く、少し目標を下げて、意欲的な活動の大胆さよりも出来映えの確かさを重視した方がよい、と彼に助言する、善意の友人たちがいなかった。そのような注意を受ける羽目になることは、彼にとっては、いつでも、恐らく、我慢のならないことであつたであろう。あきらめることは、彼には、出来ないことであつた。かつて友人に宛て、彼は次のように書いている。「あきらめるなんて、とんでもない。辛抱することと堅忍不拔とは、峻別しなければなりません。前者は女の美德ですが、後者は、私に言わせれば、男のなかの男たるゆえんの特徴なのです。それは、たとえかけ離れた目標であろうとも、定まった目標がなければ、考えられないものですし、目標達成に至るまでのあらゆる事柄に耐える力がなければ、やりおせません。このようなものを嗤う人は多く、彼らは、最も利口なのは時を利して、その時々に対応することだと言います。しかし彼らは、自分たちが気づく以前に、彼ら自身、そうすることによって時に利用され、その生活は貧しく、ごく普通に事は流れて行く、という事態についてよく考えているわけではないのです。他方、堅忍不拔に事を



なそうとする者が、長く心に懐く目標についに近づく時が来れば、その者にとっては、第二の青春の始まりを意味し、たとえ彼が目標に到達しないとしても、人生を野獣のように送ったことにはならないのです。」<sup>(26)</sup>

彼とその友人たちとの間では、案の定、かなり厳しい拒否が生まれ、誤解が生じざるを得なかった。友人たちは、彼のために何かと骨を折ったにもかかわらず、彼からは、それらは、意欲的な努力を怠らず、天空高く舞い上がる才能ある者に、小心のなせる懸念から、それでなくとも困難な道を一層困難にするものだ、という非難しか返ってこないのを、苦々しく思った。にもかかわらず、こうした非難の声を上げた者の方が、正しかったのである。なぜなら、人々は彼を誤解していたからである。この種の誤解は、日々繰り返されるものとはいえ、人が人に加える最大の不当行為である。人が自分の見方や経験からあの倦むことを知らない闘士に言うことのできたことなど、この闘士自身、何度も自分自身に言ってきたことなのである。加えて、彼は、自分の見方からすれば当然出てこざるを得ないある種の要求の実現を、我が身に強要することはできなかったことを、自覚していた。彼は自分の能力の限界を常にはっきりと意識していたとは限らないものの、自分になし得るように定められていたことは、それだけは、ともかくもなし得ることができたのである。他ならぬ友人が、彼の内面の傷ついた部分を暴き、彼を保護するように取り巻いていた幻想を打ち壊そうとしたことは、彼を絶望的な気分させた。さらに、彼の活動が求める尋常の域を越えた懸命の努力の他に、その下でのみ彼の制作が可能となる生活条件を絶えず保障する、つらい課題が加わった。

仮にマレーの作品に、いささか非凡なるものとして通用するという自負がなければ、自分の価値について常に思い違いをしている一人の男に係わろうという気を起こす者などいないであろう。理由のない幻想は、物笑いの種である。実際、マレーは、もう少しのところで、過去の時代の偉大な芸術家と肩を並べるところであったのだ。自然は彼の内部において、偽りのない重要な芸術現象の発展がそれをもとに可能となる、稀有な要素のすべてを集結させ、合流させたように見えた。たしかに、彼には自己を非の打ち所のない円満な人格に仕上げる気がなかった。とはいえ、それがために、奇異な点や欠点をことごとく有する彼の作品から、その重要性の高い価値が奪われる事もないのである。外面的な芸術実践の横行する時代のまただ中に、彼は、自然との直接的な結びつきを示す実例を提示した。彼は真の芸術がそこからしか生長し得ない大地にしっかりと立ち、そこから離れるということがなかった。彼のことを正しく理解していた者は、彼の行為の正当化を、最後に達成さるべき成果を待ってはじめて行うというまで、待ちきれなかった。言い換えれば、彼の人生は、必ずしも重要性は、常にやり直しを重ねて、その活動からすれば到達し得ない運命にある目標に向かって努力を惜しまない、注目すべき彼の活動そのものに存したのである。

イタリアの地に滞在してより、マレーが展開した活動の内容について、その特徴を述べるとすれば、彼は、絶えず、自然との美術的な関係を直接に表明し得る形を見いだそうと努力していた、ということ指摘しなければならない。友人宛の書簡の中で、彼はかつて次のように書いている。「文芸と美術において、重要なのは、一般公衆の欲求を、要求ではありません、よろしいですね 満たすことです。もちろん、真に偉大な人物たちは、皆、この欲求を汲んで対応していますし、またそれだから、その影響力は驚くべきものであったのです。[・・・中略・・・]」ところで、ことによるとわれわれは、最も仕合わせな時代を生きていると思ってもいいのではないのでしょうか。なに

しろ、過去の時代には、これほど多くの面白いことはなかったのですから。<sup>(27)</sup>とはいえ、仕合わせは楽しむことにあるのではなく、その楽しみを伝えることにあるのです。まず、歌を鳴り響かせる調べ〔Tonart〕が決まれば、あとはしめたものです。これさえ見つければ、残された仕事など、僅かなものです。」<sup>(28)</sup>一般公衆の要求について、彼が目にしたものは、殆ど全ての芸術活動がこれの犠牲になる、というものであった。人々の心の奥深くに横たわる欲求を彼は知っていたが、その欲求は、彼が、あの要求を遠ざけて、まったく新しい造形世界を形づくる時にのみ、蘇ることになったのである。

イタリアの地ではなほだ親しくなった、古典古代とルネサンスという二つの芸術分野のことを振り返ってみたとき、彼の目に映ったものは、このどちらの分野においても、途方もなく豊かな産出活動が共に、ひとつの偉大な衝動に従っているさまであった。現われ方は千差万別であるとしても、そこには、事物の視覚性に対する、どこでも見分けのつく一定の関係が表明されていた。彼はあの時代の美術家たちのことを羨ましいと思わざるを得なかった。というのは、彼らは大変にすばらしい伝統のただ中で成長し、いわば母国語でもって、造形による直接的な自然表現を修得し、そしてこの中で、彼らの描写能力が発達を遂げることになったからである。彼が認めたのは、彼らが、一定の形体言語をたしかに携えて、そのつどまるで新しい問題に直面するかのようになり、繰り返して、世界に臨んだ姿であった。彼の前に姿を現したのは、語の最高の意味においてよく考えられたといえる、そして同時に、自然に対するみずみずしい感覚に満ちた活動であった。翻って、彼自身の時代はいえ、何とか離れていることか。一般に、美術家たちは自然に対して、そして殊には、自分たちの課題に対して、心の準備もなく、途方にくれて立ちつくしていた。最も出来のよい作品ですら、無計画な、支離滅裂な試作品の域を出なかった。優れた才能ある者の場合でも、あの仕合わせな時代なら凡庸な才能の者でも手に入れることが出来た卓越した力量の域といわないまでも、せめてその近くまでも、達することができなかった。全ては次の点にかかっていると云わざるを得なかった。すなわち、芸術的な造形活動についての、支離滅裂でなく筋の通った、新しい、すばらしい発展がそこを起点に可能となる、その本源にいまこそ再び立ち返ることである。マレーが歌を歌う際の調べについて語っていたとき、彼はそのことを言っていたのだ。同時に彼にとって明らかとなったのは、あの旧来の芸術言語を修得するだけでは充分ではないということ、新しい酒を古い革袋に盛ることは出来ない、ということであった。彼にとって芸術は、既存の芸術形態にはなかった。それは、彼にとっては、独立した表現となって絶えず自己を更新するときのみ、真の生命を獲得する活動なのであった。彼はあの古人たちに親しみを覚えた。というのも、彼は彼らの活動の意味がよく理解できたからであり、彼らが共通の出発点から発して、まさしく彼らの手による美術形象へと至る密かな道を、知り得ていたからであった。彼は、美術の復興が可能とすれば、それは、彼らの場合と同様に、印象の豊かさを、美術作品において一定の表象の表現となるまで発展させる、ということを目指して努力する場合以外にはない、ことを知っていた。だが彼は、たとえ同様の欲求を持っているとしても、しかし、異なる人間として、世界に直面していることも、自覚していた。彼は異なる眼で現象の王国を眺めた。それゆえに、彼にとっては、当然、みずみずしい自然を獲得するという意義を得ることになる美術表現は、全く新しい個人的な形態をとって現れる他はなかった。彼をしてはなほだ非凡な人物たらしめたもの、それは、彼が、いたるところに混乱がある中で、実に確かな本能で、すべての造形活動の主要課題を見いだしたことにとどまらない。彼がその本性のなせる自立性のために、汲み尽くしがたい自然から、いわば新しい秘密を引き出したことも、それに数えられるのである。彼の手によって成立した造形物は、他の人々には、新しい自然の啓示

のように映った。あの、当初はまだ暗がりに沈むおぼろげな衝動を 絶え間のない造形活動の中で、ますます明瞭で成熟度の高い表現へと発展させることは、彼の一生をかけた仕事であった。絶えず更新される彼の企てを、こうした観点から眺める者だけが、そうした企ての全てが蒙った完成度の不足にもかかわらず、彼の企てを正当に評価することが出来るのである。

マレーは、その解決に自分の使命があると感じていた課題に関して、特有の困難に直面していた。いかなる造形芸術作品も、次の二重の内容が作品に付与する両義性を免れない。すなわち、その内容とは、造形による自然表現としての造形上の内容と、ある何らかのものや出来事の描写としての、題材上の内容とである。このことは、芸術生活が高まりを得て、それが芸術上の顧慮に絶対的な優先権を与え続ける限り、制作者にとっては意味を持たない。〔この場合、〕作者はどのような分野にある題材でも、同じように喜んで取り上げることであろう。なぜなら、彼はいかなる題材においても、同じように自由に、自己の目標を追究できるからである。一方、われわれの時代では、真面目な、天分ある者こそ 私の言うのは、フォイアーバッハやベックリーン、トーマといった人のことだけであるが、いかなるものであれ、時代の関心が求めるものを描写することから、背を向けている。この点は、今日の美術生産を支配しているのはなにがしかのものを描写せよという要求であることを、考慮するならば、しごく当然のことである。時代は、美術に、そのあらゆる課題に関与すべきことを求めるが、しかし、その際、時代は、美術の側では、それ自身の課題の正当な評価はいかにして可能か、ということまで問題にしない。美術は、内容のために、その目立ちたがりの作品に価値があるという見かけが得られれば、満足して、異を唱えないという無能ぶりを示して、時代に利用されるのである。〔一方、〕それ自身のために自己発展することを望む美術は、求めずとも美術に近づいてくるさまざまな生活分野によって、そこから、自らがいつの間にか排除されてあるのを認めることになる。こうしたことを、マレーも、膚身に味わわざるを得なかった。《シルの死》を描くことを企てていた年は、彼からすれば、遠い過去になってしまった。いまや彼を造形へと駆りたてた分野は、彼が題材の制約から解放されることを望んでいたことを、示唆している。古代世界、聖書に出てくる二、三の物語、聖ゲオルギウス、聖フェルトゥス、聖マルティヌスのような聖人たちが、こうしたものが、彼の想像力を掻き立てたものであった。《パリスの審判》、《パリスとメルクリウス》、《ヘレナの略奪》、《アマゾネスの闘い》、《サビニ女の略奪》といったテーマが、一時期、彼の計画と構想の中で特別の役割を果たした。それから彼を魅了したものに、また、《スザンナと長老たち》や、使徒行伝から取られた使徒ピリポと黒人の従者の物語がある。これらのテーマでは、どの場合でも、その取り扱いにおいて、いわゆる描写内容への関心が、つまり、描写そのものには含まれず、ただ描写によってのみ言い表されるものへの関心が、極端に低く抑えられているように見える。

ともあれ、これらは、美術家が対象への関心に陥らないように、過去の文化生活の時代に属する出来事を描いているのだとすれば、それらは、一種の応急処置と見なければならぬ。このような素材分野では、たとえ美術家にその中を動き回れる大きな自由があるとしても、しかし、その描写を通して、彼は、知らない中に見る者の心の中に、新たな生命を吹き込まれて蘇ったあの過去の世界、というものを見たいという欲求を目覚めさせることになる。彼自身にしても、わざと過去の考え方や感じ方に戻ってみるという試みから逃れることは出来ないであろう。そして何といても、彼も時代の子であるのだから、そこには、一種の嘘や、これまた直接的な自然表現の妨げとなる扮装が、生じることになる。

こうしたことにマレーは気づいているようだった。それで彼も、いよいよこうした分野から遠ざ



かり、そこでは最も彼らしい、自然を捉える見方を表現することができる、まったく自主独立の想像力のなせる形、を自ら生み出すべく努めたのであった。何といてもこの点が、彼の制作の中心を形成した。この点において彼は力を発揮して最高の成果を上げたように見え、その作品は、この点において最も価値あるものとなっている。

たしかに、他の美術家たちの中にも、与えられた現実を越えて行く想像力のために、その描写能力を用いることに満足を求め、また満足を見いだす者がある。彼らの中では、極めて注目すべき、そして魅力に富む現象が生じている。彼らは自然に対する一体感に促されて、明らかに自然の意を汲んで制作を続け、そしてわれわれの眼前に、われわれをして、現存するものの王国が拡張されるような気にならしめる形態や、様々な事象を提示する。しかし、彼らは、奇異なものや現実離れた絵空事にうつつを抜かすという危険を犯す一方で、彼らの行っていることはといえば、彼らの特殊な目的のために、自然から取り出された断片による、いささか気まぐれで恣意的な戯れに過ぎないのである。マレーが、語の通常の意味において、現実が意味するものから遠ざかるとき、その意味は、彼らの場合とは全く異なるのである。彼は、自分が造形しようと求めているものは、平凡な写実主義的な手法で直接的な自然の印象を再現することでもなければ、自然を突拍子もないものへと作りかえようとすることでもないことを、十分に自覚していた。シラーは述べている。「空想的な作物を恣意的に次々と並べ置くことは理想にわたることではないし、現実的なものを模倣的に繰り返すことは、自然を描写することではない。」<sup>(29)</sup>さらに、こうも述べている。「芸術家は、彼が思うように、唯一の要素を現実から用いる必要はないし、その作品が、全体として実在性を持ち、しかも自然と合致するというのであれば、どこから見ても、理想的と言わざるを得ない。」<sup>(30)</sup>マレーは、個々の自然の手本の研究から直ちに描写へと移ることは、確かにいささか手工的なものに過ぎないことを、よく理解していた。芸術活動が、個々の自然からなる題材の再現を目指し、これをどこまでも押し進めて完成に至ることに帰する場合、そこに彼は、はなはだ偏狭な手本への隷属が認められるということで、よく見かけられることではあるが、あるなにがしかの思想内容、もしくはいわゆる美の理想のために、自然の研究がおろそかにされる場合に認められるのとさして変わらぬ、真の芸術の不足を見いだしたのであった。彼のアトリエでは、しばしば多数の裸体素描が床に捨てられているのを目にすることがあった。それらは、いったん描いてしまうと、彼にとってはもはや何の価値も持たないのであった。新たに場所を作るために、彼はそれらを処分したのである。彼は自分の内部で、豊かな、情愛に満ちた、理解力のある直観から生じた自然の像を、絵画表現にまで発展させることに取りかかろうとするや否や、まず彼は、その個別的で直接的な手本が制作活動に加える束縛から、自由になる必要があったのである。彼は、自然に対して、特別な、ただ彼にのみ特有の関係にあることを実感した。彼は自分にとって自然の内容であったものに相応しい形を求め、そしてこの形を、造形制作の途上でのみ、見つけることが出来たのである。こうして、彼には、人間はただ創造的で理想的な造形活動を通じてのみ、最高の実在性の表現にまで達することが出来る、という真理が頭わになったのであった。絶えず周囲の世界から入り込んでくる刺激を深く感じ取り、その人の心の中で、ある欲求が、すなわち、そこでは、この人によって、この人にとっての目に見える自然であるものの表象にまで至りつくことが可能な、一つの像を見つけ出したという欲求が、大きくなっていく場合、この人こそ、まさしく、自然から芸術へと至る途上にあるのである。たとえ像に直接的に対応するものが現実の中に見いだせなくとも、この人が、目に見える世界に対するその豊かで深い関係をそこで発展させる造形活動には、本来の真理が存し、目に見える現象である限りの自然の印象が、これへと高められることが出来るのである。「いかなる



形にも、たとえそれが極めてよく感知できるものであったとしても、何か嘘のようなところがある。しかし断然、それは、広大な自然が放つ聖なる光を、これを通して、燃えるような眼差をした人間の心へと集める、レンズと言うべきである。」(ゲーテ)<sup>(31)</sup>

マレーは自己の芸術表現の欲求に応じて、いかなる題材の内容も決定的な役割を果たさない形を求めたが、これによって、彼は新たな一步を踏み出した。彼は、造形芸術家が、人間がなせる感覚、思考、行動のありとあらゆる分野に対して、伝統的に位置する雇用関係を乗り越え、美術をして、曖昧さの全くない視覚的現実の表現たらしめたのであった。そしてそうすることによって、自主独立のもの、それ自身で満ち足りたものとして、美術を、人間精神の他の偉大な活動方式に並ぶものとしたのである。こうした懸命の努力において、いつか彼の継承者が出てくることになるのかどうか、それは誰にも分からない。世の人々が、個人が万難を排して混沌から明瞭へと達した道の後に行く、というのは滅多にない。しかし、どうやら美術は、ただそのようにしてのみ、その純然たる形態を手に入れることができるのではあるまいか。そうしてこそ、美術に内在する感覚的価値および意味価値にまつわるあらゆる誤解は、一掃され、美術は、その本来固有の表現価値においてのみ、すなわち、そこでは、人間が自然の視覚性〔可視性〕を直接的に表現し得る言語としてのみ、取り扱われ、理解されることになるだろう。

もちろん、マレーに際立つ重要性を与えるには、はなはだ新しい自主独立の道を彼が選択したという事実を示すだけでは、不十分であろう。そうした重要性は、彼の制作の一般的なやり方からは生じ得ない。それは、その特殊なやり方から生じる他はないのである。この点に関していえば、現存する彼の作品を見ても、不十分な理解しか得られない。彼の目標は手近にあるものではなく、個々の特定の作品の方を向いてはいなかったからである。彼の制作方法では、多くの試みを何度となく駄目にしては、新しい表現方法を求め続けた、ということがある。もし彼と生涯をともにした人がいたなら、その人こそは、彼の不断の闘いを、すなわち、彼の眼に捉えられた見事な自然が刻々に変貌を遂げて存在にまで高まる闘いを、目にすることが出来たことであろう。しかし、彼の友人の誰一人として、しばらくの間歩みをとともにすること以上に、彼と同行することはなかったから、誰も、彼の生涯にわたる偉大な研究の、個々の段階の全てにわたって説明を加えることなど、出来ないのである。われわれに出来ることはといえば、今でもわれわれの手に入るもの、よくあるようにほんの偶然から残ったもの、未完成の状態でもしくは意図的な歪曲を加えられて現存するもの、こうしたものから、重要な造形過程が、内外のよくない事情のために、自由でのびのびとした発展を妨げられたかを、暗示する、ということに過ぎないのである。

マレーにあっては、ローマ滞在の最初の頃より、たいいていは裸体の人物群を風景の設定の中に適度に配置していたが、そこから、独特の芸術的表象世界が発展してきた。彼は、人間生活が事物の本源的な姿を覆い隠すのを常とする扮装を描くという迂路を経ずに、直ちに、隔てるもののない自然の大地に身を置いて、これを紛れもない出発点とした。そしてここを基に、視覚性の王国に対処することが出来たのであった。これが、彼の制作の中心点であった。常に彼は、その主要課題に向かうように、この点に立ち戻った。そして彼はそこに、それでもって彼の豊かな自然体験を直接的に表現し得る言語を見いだしたのであった。その際彼は、外見上はいとも簡単そうに作品に向かったように見える。彼の描く風景は魅力に富むが、しかし、そこに見慣れないものを求めても無駄である。川沿いの草原、なだらかな丘のような地形、ほどよい樹木の群、ときどき見かける水面、は

るかな稜線、彼が眼に示したものは、これですべてである。時折彼は、会堂の類、人が動き回れる空間といった建築物を暗示的に描き入れることによって、絵を賑やかにする。彼の描く人物は、静謐な存在以外の、殆ど何もかも表現してはいない。老人、壮年男性、若い男性、若い女性と子供たち、こうしたものの中に様々な配列。それらの姿勢に意味を持たせようとする場合には、彼は極めて単純な作業を選んで割り当てる。こうして彼の絵には、殊の外頻繁に、オレンジをもぐ男の描写が登場する。初期の頃から彼がある種の偏愛を示していた馬も、好んで下図に取り入れられた。

彼の活動をせめていささかなりとも辿る機会をもったことのある人なら、このような単純な要素を用いることに、何と豊かな想像力が活動していることかと、驚いたに違いない。また、あの最初のイタリア時代に彼が取り組んでいた企てと、この同じ課題が絶えず追究されて彼の晩年に出現した形態とを、比べてみる事が出来る人がいたなら、その人は、そこには、生涯にわたる課題というものがあつたことを理解したに違いない。この場合の問題は、すでに述べたように、恣意的な想像力の戯れというものではなかった。マレーは、現象世界の事実性をはなはだ肯定的に受け止める感覚で、傑出した存在であった。彼には、事物の本質は、その視覚性において姿を現した。他の人にもまして、彼にとっては、視覚的に現にあるものが重要で価値あるものであつた。彼を外の世界に密接に結びつけたのは、感性的な関係であつた。彼は自然に従い、彼をして、いかなる微細な点も知覚させ、いかなる刺激も逃さない、しなやかな感受性でもって、自然に帰依した。しかし、彼は、あまりにも熱中して夢想に陥る、ということがなかつた。彼の本性の男らしい力は、彼を取り巻き、彼の心を占めたこの豊かな自然の生命を、彼の立場で、ますます明瞭で徹底した表現へと発展させることに努力したことに、現れている。

芸術作品において、生き生きとした自然の真理に最高の表現を見いだそうとする、こうした熾烈な闘いは、造形活動の二重の発展において繰り広げられざるを得なかつた。発展の一つは、本来的な意味において構成と言うことのできるものに係わる。この芸術家の関心的である表象要素の、決して休むことのない改造において、そして、その表象要素を適度に組み合わせて絵にもたらすという常に新たな追究において、絶えざる進歩が認められた。新しい試みが行われるときには、いつも、自然の印象に手を加えて、一つのまとまりのある視覚表象たらしめる、ということが明らかとなつたが、それは、かなり意識的で計画的なことであつた。そしてこれと密接に関連するものに、もう一つの発展がある。マレーの場合、これは、顕著な、しかし同時に宿命とも言える役割を演じたものである。すなわち、イリュージョンの達成に向けての発展である。芸術作品は、それが芸術家によって遂行された自然の啓示であるというのなら、その作品の外観に具わる説得力でもって、自然の印象と競うことが出来るに相違ない、ことは明らかである。その場合、もはや模倣は論外であるし、描かれたものの信憑性は自然の手本との一致に従って測られてはならない。自然に代わつて、芸術作品が登場しなくてはならない。そうしてこそ、われわれは芸術を、自然を通して見ようとするをやめるであろう。むしろわれわれは、芸術から自然の見方を教わるように、身を屈めて、芸術に服することであろう。マレーは、彼の絵が、生命が宿するというイリュージョンを呼び起こす地点まで完成させることに、自己の力の大半を費やし、驚くべき精力を傾けた。そしてその地点こそ、彼が失敗した地点であつた。彼のアトリエで、マレーの制作の進捗ぶりをたどることが出来た者は、彼の絵のどれもが、そこから意図が曇りなく純粹に輝き出ている段階に達していたことを、観察することが出来たであろう。そのような状態にある彼の創作を目にすることは、得るところの大きいものであつた。それらは語の最もいい意味における、自然の啓示であつた。それらは、人がこれまで体験することが出来た自然の印象とは比べものにならない位に強い、自然印象の力で

もって、見る者に迫った。目に見える世界の王国はそこに、そのような凝縮した表現となって見いだされたが、この見る者の目に驚くべき現象として現れたものから、この王国に至る全く新しい展望が開けた。これらの絵を見る者は、たしかに、絵を、発展のこの地点にとどめて、これを見たい、と願わざるを得なかった。それらの絵に付きまとう未完成の要素は、絵を際立たせる類稀な美点の影に完全に隠れていた。だが、この芸術家自身の頭には、これとは全く異なる完成の理想というものの方が浮かんでいた。彼からすれば、自分が達成したものは、彼が達成したいと望んだ成果の力強さや純度に比べてみれば、それを暗示する程度のものにしか過ぎない、と思わざるを得なかった。彼はよく、慎み深さについてと同時に、至る所で自然の像が影響を及ぼす際の力強さについて語った。それで彼は、芸術作品についても、技量の思い上がりを示す跡はすべて芸術作品から消し去るべし、と要求した。さらに、芸術作品は人の手によって作り出されたものという効果を見せつけてはならず、それは作り出されたものを通じての他はないが、しかし、それでいて直接的な現象が放つ十全の力を獲得すべし、と要求した。彼は、自分が考える完成に至るには、長い道のりが必要であることを、よく心得ていた。彼の美術仲間が普通に完成と呼んでいるものは、その実、手際のよさと名人芸の見せびらかしであることを、あまりにもよく見抜いていた。そうしたことでは、あの真の芸術の完成に至る道の発端にも立っていないことを、彼は知っていた。彼自身にとってと同様に、彼の絵にとっても宿命となったのは、いまや究極のもの、最高のものが達成されるかと思える、まさにその地点で、彼の力が尽きたことであった。最初はすばらしい出来ばえを示す造形物は、飽くことなく加筆し続けることから、説得力のある完成に至らずに、しばしば歪んだ形として、結果したのであった。

マレーの活動の細部にわたるつもりはない。しかし、ここで言うておかなければならないことは、彼の多様な絵画的試みの中から次第に一定のテーマが発展してきたこと、そしてそのテーマの処理において、彼は自分と自然との関係を、多彩に構成された包括的な表現へと定着させることが出来るようにと、願った、ということである。この種の絵のことを彼はヘスペリデスものと呼び、彼の生涯の後半において、主に、この種の一連の造形を増加させることにつとめた。そのとき、どうやら彼の念頭には、まだ、特別な思いが去来しているようであった。1873年の夏、彼はナポリにある海洋物研究所の建物の一室をフレスコ画で飾った。それは彼の生涯の中で、外からのきっかけで彼の活動が開始された数少ない事例の一つであった。企ての全体はすみやかに実行に移された。マレーは大した準備をすることもなく着手し、広範にわたる制作を夏の数ヶ月で仕上げた。二本の描かれた付け柱によって一つの大きな面と二つの小さな面に仕切られた、一つの横長の壁、そして幅の狭い二つの壁と窓側の壁、これらに、絵が施された。マレーは何か決まった制作プログラムに縛られていた訳ではなかったから、自然な感覚で、彼の最も身近にあるものに手を伸ばした。島のある海。船の方へと網を担ぐ漁夫たちのいる湾。オレンジ苑と無為に時を過ごす人たちのいる陸地。そして最後に、マレーと同様に、この若々しい企画に力を捧げた人々との、友情に満ちた集いの思い出。全体が、いわば即興曲のように見えるのは否定しがたい。ともあれ、ここでは、周囲の生活が、つまり、大地と海にわたって繰り広げられるこの広々とした全くすばらしい世界が、光と輝きや、植物が豊かに繁茂したありさまと厳かな静寂、そして本来の自然に即した活動と静観的な無為な生活とによって、内部編成が行き届いて、しかもまとまりのある、ひとつの明確な表現へともたらされた、その仕方に、マレーの優れた芸術的な力が現れている。

窓側の壁に描かれた絵には、豊かな自然のまっただ中に、快適な暮らしぶりを示す、憩う人物たちが描かれているが、そこには、すでに、後になると、一連のヘスペリデスものに広がることにな

る、あの絵画的な世界が現れている。たしかにマレーには、企画がすみやかに実行に移され、いわばあっという間に出来てしまったこうした一連の絵画よりも、出来がよくて、熟成したものを、いずれ自分は作ることになるのだ、という思いがあった。しかしまた、彼は、自分が思う最高のものは、ただこれと似たような課題が与えられたときにのみ、達成可能になるだろうことも、意識していた。彼の望みは、つまるところ、いつか自分に、感じのいい空間が任されて、全く自由に、思いのままに絵で飾ることが出来たなら、というものであった。一連のヘスペリデスものの制作から残された様々な画稿や絵を見てみると、彼が自分の課題をどのようなものと考えていたかが、予感される。そうした空間が彼に任されたなら、それは、彼にとっての舞台となったことだろう。すなわち、彼の眼が、様々な刺激や印象、また洞察力を手がかりに、広がりや充溢、豊かさの点で捉えきれない自然から得た全てのものを、彼が、ひとつの包括的で統一のある、しかも豊かに編成された造形表現にまで高める舞台、というものである。そのとき、彼が自分の絵を、絶えざる達成目標である、説得力のある生命力を獲得するまでもたらずことに成功したなら、絵を見た者は、その絵から、非凡で価値があるという印象を受けたことであろう。絵を見る者がそうした絵で飾られた空間に入ったなら、その人は、現実感を失って、まるで夢の中にいるかのように、周りのものをあらためて見つめることだろう。だがこの人は、自分の周りのさまざまな形態を見ることに沈潜すればするほど、自分は見知らぬ世界を前にしているのではなく、目に見える自然そのものの秘密が顕わになった姿を前にしているのだということが、いよいよ明らかになってくることであろう。この人物にとっては、その眼が外の視覚性の王国で体験し経験した全てのことは、いまや、脈絡のない、混乱した、一時的なものであったと、思えてくるに違いないことであろう。そのように、いまや彼には、明瞭で、限定された、見通しのきく、統一のとれた絵というものが立ち現れてくることになるだろうが、その絵はといえば、卓越した精神の持ち主が、不断に過ぎ去りゆく中に捉えた現象に対して、彼に向かって、造形された形として姿を現すようにと、また彼に弁明するようにと、強い結果生まれたものなのである。

マレーには、せめてもそのような非凡な成果に至る試みを行うという幸運な機会は、決して与えられなかった。次第に彼は控え目となり、自分の芸術を広く世間に知らせる別の仕方を考えるようになった。正当にも、彼は、普通に見かけられる展覧会というものに反感を抱いていた。それで、公共の場に出るといふ彼の決意は、独力で、一連の組をなす作品を携えて登場する以外にはあり得なかったであろう。彼が最後に取り組んでいた下絵の前にたたずむと、心を動かされずにはいられない。<sup>(32)</sup>列柱のある広間の手前には、優美な仕草で動く男女の人物がおり、中心に向かっては一人の若者が求婚する身振りで一人の若い女性へと近づく。優しい気分の溢れた、期待に満ちた人間生活の一コマを描いた絵である。広間の入り口へと続く階段には一人の男性の姿があり<sup>(33)</sup>、その体形からかすかに美術家自身を思わせるが、招くような身振りで、画面の外にいる者たちに中に入るように促している。本図は、この美術家が、見せるに値する人間の、ものを見る眼に提供できると思ったものための、すばらしい準備の作と言うべきである。

先ほど述べた作品は、マレーの後半生において支配的であった気分にとっても、特徴的なものである。彼に見られた自信満々と絶望との激しい交替は、徐々に消えていった。彼は自分が得ようとして努力したものを、為したものについて、世間の人々に認知させる機会はまだ自分に残されているに違いないという、心静かな確信を持ち得ていた。書簡に見える各種の表現はこのことを伝える。



そのうちの幾つかをここに挙げてみよう。

「私のせいであれ、他人のせいであれ、私はこれまでに全てを無くしてしまいましたが、しかし今なお一つだけ残っているものがあります。希望です。これだけは今も完全に諦めることは出来ません。」<sup>(34)</sup>

「私の普段の行為に関して言えば、私の脳の中の〈アウゲイアスの牛舎〉<sup>(35)</sup>は今や完全に掃除された、と断言できます。収穫の乏しい七年を送ったのだから、これからはおそらく収穫の多い時代がやってくるでしょう。」<sup>(36)</sup>

「私はこのところ、調子は全くいいとは言えないが、しかし、成果豊かな生産活動に不可欠のアルキメデス状態<sup>(37)</sup>に、徐々にではあるが、ますます近づいているというのを感じますし、また、それだから、数人の人たちにとって、ひょっとすると私がそう映っていたものにすら、自分がなれると期待してもいいのではないかと、感じています。もう少しの間だけでも私のことを信じるのを止めないで下さい。もちろん、このことはもう何度もあなたの耳に入っていることですし、私だって承知しています。にもかかわらず私は明るく、そしてうろたえることなく落ち着いて歩き続けなくてはなりません。『我が後に洪水は来たれり』<sup>(38)</sup>という風潮はいよいよ流行となってきましたが、少なくとも私はこれに決して染まっていませんから、その限りで、そのように落ち着いて歩き続けることが出来るのです。」<sup>(39)</sup>

「私に関して言えば、全力を尽くして、私の表象の真の写しを手に入れるという私の本分に取り組んでいます。うまくいくようです。ただ、私は身体の調子が思わしくないものですから、このことに取り組み続ける限り、この場合でも、最後の言葉を言うようにと迫られます。最高の出来のものとの何らかの繋がりや、少なくとも高い志を持っていれば、この本分のことが分かったよき理解者に出会えることもあるでしょう。」<sup>(40)</sup>

「ところで私の外面的な生活がどのようなものであれ、私の天職においては、相変わらず、安んじて、晴れ渡った日のどこまでも澄みきった明瞭さを待ちわびています。」<sup>(41)</sup>

「私の自信に満ちた気分の抛ってきたる所はいたって簡単です。このところ、ますます強く感じさせられるのは、すでにごく若い頃から、いかなる事情があっても、そこを起点に活動してきた、私の本来の気質に、私が再び立ち戻った、ということです。これから私が奇跡を成し遂げようとするのは非常にむずかしいとしても、しかし、結局、どのようなものを作ろうとも、それが発育不全でないとするれば、ただちに人はそれに喜びを見いだすはずです。

外面的に見れば、私はいよいよ黴臭くなっていますが、内面的には、それだけ一層若返っているのです。もう少しすれば、私は水を得た魚のようになり、二度とやすやすとそこから追い払われることもないでしょう。おそらくご承知のとおり、私ははなはだ注意深い人間です。何かとためらい、熟慮を重ねて、ようやく小舟を岸から離すのですが、また、なぜそうするのかという点も忘れずに押さえるのです。」<sup>(42)</sup>

「目標にいたる道のりはまだ遠いということが分かっているが、しかし、それでいて、それにいたる見込みはいよいよ歴然となってきました。だから思いのままに振る舞うこともできますし、勝利の確信を捨てきれないでいるのです。」<sup>(43)</sup>

「たとえ私自身、自分の作品に満足するということが起こり得ないとしても、しかし、それらの作品には、他の場合には求めても無駄な、二、三の特性があることは承知しています。何よりもまず、それらの作品は相互に関連した一つの全体を表し、その上に上部建築が可能となる土台を形づくっています。それらの作品にまだ望むべきことは少なくありませんし、そのことはおそらく、私自身が一番よく知っています。それゆえに私は、今一度、この現在の境遇においても、勇をふるって、若干の過ちを避けるなどの努力をしたいと思っています。そうすれば、この新しい絵は、ごくさやかながらも、この現代の最終決着となるはずです。」<sup>(44)</sup>

求めていた目標をほぼ達成したというこの確信には、また、晩年になると、マレーが相当な内面的平静さに到達した、ということが絡んでいる。確かに、以前からあった自分の能力に対する疑念や、不運への嘆きは、彼の中で繰り返し蘇ったことであろう。しかし、齢を重ねるにつれて、彼はそうしたことを口にするのが少なくなってきた、ということには、ある種の男らしさが認められた。ただそうしてのみ、彼は、彼の心から決して消え去ることのなかった暗鬱たる力が、彼を完全に支配するに至らなかった、という事態を達成することが出来たのである。彼は繰り返し、自分は長生きできない運命にあるという確かな思いを語っている。今や彼は友人達の期待に反してあまりにも早く天に召されてしまったから、彼の晩年の書簡に見られる多くの表明は、独特の意義を帯びるのである。それらは、終わりに近づいた彼の生涯の経験の、最後の帰結のように聞こえる。ここでまた、彼の書簡から、そのようなものの幾つかを挿入しよう。

「概括的に見れば、私は蝕まれて、ひょっとすると、実に諧謔的な人生観を持つに至ったのかも知れません。この人生観では、ひとは、皮肉と嘲りとを退け、卑劣で腹立たしいことを何とか遠ざけて、愚かなことに出くわせば神の名を唱えて脱兎のごとく逃げるように、教わるのです。」<sup>(45)</sup>

「私は自分がなす万事において、最良の人たちと彼らの評価を眼前に思い浮かべるようにしています。思うに、今日の人たちも、これまでの時代の人と変わるところがありません。彼らは、その後につき従ってメーメーと鳴いていられる先導の羊というものを求めているのです。分別のある人たちが同時に権威をもっているのなら、それはよき時代です。」<sup>(46)</sup>

「私が望みをいだとすれば、それは、私に残された僅かな年を、私の志に根ざしたいよいよ私心のない活動のために使いたい、というものです。そうできれば 私も 無駄に生きたのではなかった、という希望がもてると思うのです。」<sup>(47)</sup>

「そうなれば、私としては、確かに満足せねばならないでしょう。というのは、運命は私の若い頃の主たる願いを、つまり、飽くことなく制作する力と純然たる即物性とを手に入れたいという願いを、かなえてくれたのですから。」<sup>(48)</sup>

「私は、自分に必要と思えたものを求めて努力してきたのだという、気の安まる穏やかな意識は、たとえそれが幾重にも間違っただのものであるとも、常に、私に、物事に拘泥しない心というものを与えてくれます。私の場合、この物事に拘泥しない心があればこそ、いかなる困難も乗り越えられるか、もしくは、不可避のものを正当な仕方でも耐えられるのです。」<sup>(49)</sup>

「よき志のみが、人間の存在と行いに価値を与えるのです。このよき志には、不可欠にして、しかも持続的な作用を及ぼす力があり、それゆえに、これを他の個人に伝えることに成功するものがいれば、その者は、自分のよき部分が滅びることはあり得ないということ、確信することが出来るのです。」<sup>(50)</sup>

「認識に、明晰にいたる道は、しばしば大変に厄介なもので、よく頂上を極められないと思われるものですが、しかし、この道は報酬をももたらしてくれます。認識とともに真のユーモアが生まれ、このユーモアとともに、人が手に入れ得る限りの最高の人生の幸福が、もたらされるのです。」<sup>(51)</sup>

われわれはマレーとお別れする前に、今一つ、彼の生涯の一面を思い起こさなくてはならない。それは、あまたの希望の挫折にもかかわらず、絶えず彼に、無駄に生きたわけじゃなかったという感情を生き生きと蘇らせたものである。すなわち、若い美術家を励まし支援することで、彼らに影響を与えたという、一面がこれである。彼の同調者と見られる全ての人の、一致した意見では、この人たちは、彼によって、いわば救われたのだ、と言う。つまり、彼らは、さまざまな誤りへと導く危険な美術実践の実例を通じて呪縛されていたあらゆる囚われの状態から、彼の手で救い出されたのである、と。

自分で経験したことがない者には、今日、いかに厳しい試練が才能ある者を待ち受けているかを、推し量ることはむずかしいであろう。確かに、今の時代では、おべっか使いに事欠かないし、今後ともそうであろう。彼らの話しぶりを真に受ける者は、次のような事態が、才能ある者にとって、素晴らしい時代の出現といえるのかどうか、よく考えてみなくてはならないであろう。すなわち、刺激に溢れ、あらゆる方面への育成手段が豊富にあるという事態や、ある種の特性の発展を阻害する学校の強制や先入観も存在せず、各人は自分の掟を見いだすという事態、また、美術に対する感受性の異常な昂揚と、公的権力による美術の保護育成の高まりとを担保として、各人は安心して、その能力の使い道がないわけではないし、頑張れば成功も夢ではないだろうと思ってしまうという事態が、それである。残念ながら、こうした事態は、華やかな外面でしかない。そうした外見上の素晴らしさの裏には、実に悲劇的な現実が隠れている。アンゼルク・フォイアーバッハの手になる『遺言状』のような書物を読めば、人は恐らく考えさせられるであろう。そしてフォイアーバッハのような事例はこれにとどまらないのである。公的な美術界は非公的な美術界と対立している。公的な美術界では、劣った能力の持ち主と不純な努力とが本来受けるに値しない栄光と名声とを得ているのに対して、この時代の真の美術生活が見いだされるのは非公的な美術界である。しかし、ここでは、人々の注目や承認、支援を求めても無駄である。紛れもない天賦の才能と真剣な努力とで際だつ人々こそ、好都合な境遇から排除され、横柄な態度と無理解だけが幅を利かす不当な圧迫に、苦しんでいる。個人は長い闘いのあと、ようやく世に認められることができる。フォイアーバッハ

はこうした人々の中の一人であったし、彼はなんと厳しい受難の出来事を世に語ったことが。まだ存命の他の人々の名を挙げるつもりはない。彼らの道は孤独で険しい。彼らが出くわすものは、落胆させられる事と障害ばかりであって、彼らが身を滅ぼすことがないとしたなら、そのことは、ひとえに彼ら自身の力と頑張りとによるものとしなければならない。

一層重大なのは、才能ある者が、彼らに差し出される間違った教育方法によって脅かされる危険である。その才能を荒廃させるのは、第一に、アカデミックな教育である。そこでは、凡庸なものが、不遜にも、公的に認知された重要性をもって現れる。美術作家で美術教師として任じられている者の手になる、模倣すべき作品として、最大の過誤がまだ純真な青年に差し出される。手本や対立する意見よりも、自分の洞察力に高い価値を付与するだけの自信がない者や、自己のより良き部分を救い出すことが出来さえすれば、すべてを賭けてもいい、という勇気をもたない者には、救いがない。健全な才能に恵まれた無数の者が、外面的な成功と公的な承認へと通ずる、通い慣れた道へと送り込まれることによって、破滅する。このとき、マレーは実際、窮地の救い主となった。今日、美術の生活を歪めて戯画たらしめている、荒んだ行為や憐れむべき行為を免れた者は、マレーにおいて、美術への信頼を取り戻すことが出来た。マレーにおいて、こうした者は、それまで自分の周りで目にした不純な行為や誤りとは全く無縁な世界に、踏み込んだのであった。この者にとっては、目から鱗が落ちる思いがしたに違いない。彼は、それを忠実にを行うことで、彼の活動がアカデミックな教えと手本に強く縛られるところであった、こまごまとした、特殊な課題の全てから、わが身が一挙に解放されるのを感じた。マレーにあっては、目に見える自然を造形された表現へともたらずこと以外の何ものも、重要でなかった。この者は、いわば、これまでの生涯で初めて、自分が自然と直に向き合っているのを感じた。なぜなら、マレーは、絵を描き、造形しながら自然に近づき、ますますこれに接近すること以外の何ものも、要求しなかったからである。そして同時に、その者の眼の前に、はじめて美術の王国が、その普遍的な意義において、開けたのである。その普遍的な意義における美術において、その者は、より高次の存在に発展した自然そのものを見、かつ認識することを修得したのである。「学問は、」とマレーの書簡の一節は語る「これに至る最初の萌芽を、おそらく好奇心に有して、未知のものを探究する。一方、芸術は、できるだけ万人に周知のものを取り扱う。舞台は人生を写す鏡の如しと言われるが、これにとどまらない。思うに、その結果においては、学問と芸術とは、周知のものが、この学問と芸術とを通じて、常に新しい、ないしは、より豊かな、より練り上げられた相貌を獲得する、という点で、一致するのです。」<sup>(52)</sup>

多くの人たちにとって、マレーとの出会いは、彼らの使命についての未発達、不明確な状態から、その十全な自覚に至るまで、彼らを目覚めさせ、そしてそれ以降の彼らの全生涯に決定的な影響を及ぼす、一大事件となった。この年長者が若者に指し示したのは、自然から美術へとただちに通じる道であった。彼のあとにつづくことが出来た者は、彼とともに、自然を、純然たる芸術的意味において体験し、同時に、美術を、それがいかなる時代や民族に属すものであろうとも、その本質において、つまり、美術作品となって眼の前に現れる自然の表現として、捉えることを修得した。オランダ旅行について、マレーは書いている。「アムステルダムで、私の旧友の、レンブラントとファン・デル・ヘルスト<sup>(53)</sup>から、いかに非常な満足を得たか、これについては、いふべき言葉を知りません。いまや私は、もはや流派の違いなど問題ではない、と思うようになりました。好いものは好い、それで十分です。」<sup>(54)</sup>またパリから彼は次のように書いている。「ここで<sup>(55)</sup>私が最も興味をひかれたのは、ミケランジェロの二体の奴隷像でした。たしかに、それは私の好みのタイプのように思えないし、好みのタイプだから真っ先に私の注意を引いたのだ、ということでもありません。む



しる、私の注意を引いたのは、その描写が信じるに足るということのためなのです。人はただちに、どこが骨の部分で、どこが肉の部分であるかを見て取ることが出来ます。これによって、人は、素材が何であるかや、それが手仕事によって出来たものであることを忘れ、そこに生命の宿ったものを見るのです。そしてこの点こそが、造形作品が装飾以上のものを目指そうとするのであれば、まず、求められるものなのです。いかなる場合であれ、自然は、関与を促します。だから、手本の完全性でなく、ものごとを理解する力の完全性こそ、なにがしかのものを、美術作品たらしめるのです。」<sup>(56)</sup>

マレーを囲む全ての者が、彼から受け取った、宝のような触発と教えとは、際だって豊かなものである。しかし、一々にわたる個別の伝授以上に、はるかに重要なのは、マレーが信奉し、周りの者にも伝えようとした、倫理的色彩の濃い一般的な立場であった。すなわち、それは、彼の真剣そのものの姿勢、その即物性、その無私の態度であった。「多彩な知識、豊かな才能、卓越した技巧といったものは、」とあるとき彼は胸中を述べている「それらが健全で、純粹、自然な感覚によって導かれることがないならば、結局、何の役にも立たない。それゆえに、私は、繰り返し、新たに、美術家は自己の人間の性質に、またその人間関係に、最大の注意を払うべし、ということに肝に銘じなくてはならないのです。」<sup>(57)</sup>また別のときには、次のように述べている。

「何らかの美術に携わる者の全てが、およそ、美術の課題は、あげて、共に生きる者達に、存在するものに触れる喜びと享受とを容易に得させることにあり、彼ら自身の自我を押し通すことにあるのではない、ということさえ、絶えず確認してくれればいいのですが。この後のこと〔つまり、彼ら自身の自我を押し通すこと。〕なら、作品がその秀逸さを通じて、成し遂げるに違いないのです。」<sup>(58)</sup>

マレーはいつも、「芸術家の志」〔*künstlerische Gesinnung*〕という表現で、彼にとって健全な制作の基礎をなすと思われていたものを要約的に述べていた。すべては志しただ、と彼が語るのを、人々はよく耳にした。彼はある友人に宛て、書いている。「今日では、人はごく自然な、単純な志を取り戻すために、はなはだ長期にわたる浄化の過程をくぐり抜けなくてはならない。」<sup>(59)</sup>彼が芸術家の達成能力への要求を、芸術家その人への道徳的要求として提示したこと、この点にこそ、彼の主張の特色があった。たしかに、よき芸術家になるには、志以上のものが必要であることは、彼も承知していた。しかし、時代の危険な影響下にあつては、優れた道徳的能力そのものの欠如こそ、傑出した才能の持ち主をも損なわせてしまう元凶であることが、彼には分かっていた。一般に、彼には、人間本性の個々の側面を区別して考察することは、縁遠いものであった。彼は人間を一個の全体として捉えるのを常とした。それだから、彼が、十分な資格をもった芸術家だと言う場合、個人の通常の性質など問題にならない、ある特別な能力の行使について考えているのでなかった。むしろ、彼にとっては、芸術家も一個の全体的な人間なのであった。彼の思いでは、芸術家は、芸術作品の作り手以上の存在であるべきなのであり、人間本性の、その特殊な部分的修正であるべきなのであった。マレーはこれまでまだ、人生を達成結果の集合と見、人間をこうした成果を生み出す手段としてしか見ない見方を、獲得していなかった。彼にとっては、まず、人間そのものが、人生における最重要課題であった。優れた、健全で永続的な業績を達成しようと望むならば、個々の才能ではなく、全人格が陶冶されねばならないとする、今やますます失われていく認識を、彼は今なお持ち続けていた。

マレーは、周囲の人たちに大きな影響を与えていることを自覚していた。それゆえに、多くの者たちが自分の後を引き継ぎ、その教えと手本に従ってくれるならば、彼と彼の作品から、芸術生活

における新たな、祝福に満ちた運動が生まれ出るものと、当然のごとく、確信していた。彼は時代とともに、時代のために生きたいという思いをもっていた。埋もれた天才といういやな役割を演じることほど、彼に無縁なものはなかった。憎しみのこもった尊大な態度で世の中に背を向ける人々の群れに、彼は属していなかった。彼は関心と賛同を求めた。彼は最も優れた人々をこそ満足させるものができたなら、そのときには、それらの人々から関心と賛同が得られるだろうことを確信していた。また彼は、若い芸術家にあつては、彼と同様に、努力を惜しまぬ気持ちを抱きながら、自力では、ひとを惑わす時代の影響から身を護ることもできず、自己自身に忠実であることもままならない人間が多いことも知っていた。そうした若手の芸術家とともに、浅薄な芸術の取り扱いが蔓延するただ中に、真の芸術家魂の見本を打ち立てるべく、彼らを身の回りに集めて指導し、彼自身のライフワークに参加させることは、彼にとっては願望にとどまらず、彼が自らに課した課題なのであった。

そしてこの場合にも彼の男らしさが歴然としていた。こうした努力が公的生活から孤立し、また、成功することが少ないことからすれば、そこに一種の党派心が生まれてくるのも当然であった。ローマで暮らしていると、いずれにせよある種の思い上がった自意識が喚起されがちであるが、これは、同時代の生活や日々の関心事に活発に関与するすべての人々に対する、一種の軽視を意味する。ときおり彼は、彼の世界に立ち入った人々が、目的の港に入港したと考え、世間にまさる共同体に属したのだから、彼らが、世間の関心を拒むことができることをいささか自慢する、という経験をもった。マレーは自分がひどく誤解されていると思ったときは、大変不機嫌になることがあった。彼は再三再四、ひとかどのものになろうとすれば、自分の足で立ち、一般社会に属さねばならぬことを指摘した。彼はある書簡の中で次のように述べている。「友人を満足させるだけでは、まだ芸術とは言えません。無関心な人々を驚かせて平静でいられなくする。そこからが芸術と言えるのです。友人の判断を重視しすぎると、往々にして判断は甘くなり、何ら一般的な正当性や意義をもたないある種のものに夢中になるという事態を招きます。ある人にとって楽しいと思えることに、他の人々も気が付かないうちに喜びを感じるようにもっていくこと、そこが一番難しい。わかりきったものがいかなるものであるかを認識すること、そこに物事の核心があります。ひとがまだ何らかの影響下にある限りは、事態はそうはなりません。ひとには自らの意志で事態を加速させる力はないし、人間の発達には、樹に実がなるようなものなのです。」<sup>(60)</sup>

われわれのよく知るひとりの人物、われわれがともに体験したある運命を、一つの偉大な典型例と比較し得るといえるのは、なに程か、心の安まる思いがする事柄である。すでにマレーの生前に、彼の友人たちによって彼とハインリヒ・フォン・クライスト<sup>(61)</sup>との精神的類縁性が指摘されていた。偉大さと不幸の程度においてまさるこの人物との類似点を追想することで、われわれは故人についての考察を終えることにしよう。

名声と同時に悲運、これが世にクライスト的性格と呼べるものである。クライストと同様に、マレーもまた最高のものを手に入れる必然性と資格が自分にあると感じていたし、彼も通常の道を行くことに我慢がならなかった。彼は新たな芸術理想の実現こそ、自分の使命の真骨頂だと見ていた。すべてを賭ける、これが彼にとっても特徴と言えるもので、これを旗印として彼は勝負を挑んだ。だから究極の勝利が絶望的である場合ですら、自分が望んだものの正しさと必然性に対する確信は揺るぐことがなかった。それゆえに、彼が抱いていた思いは、次のようなかの有名な言葉としてク

ライストが語っているものと似たものであったろう。「わたしはまだ現存しない人に対して畏れ多くも身を退いて、一千年も前からその精神に対して頭を垂れる。なぜなら、私がかねてから考えてきた創作物は人類が考え出した一連の創作物の一分枝となることは間違えようのないことであり、このことが、かつて私の創作物を明確に表現した精神にはきつとどこかで、石を大きくしてくれるだろうからである。」<sup>(62)</sup>ひどく張りつめた理想主義は、生活を強制するある強力な力と対をなしていなければ、バランスを欠いたものとならざるを得ない。このような性分の持ち主にとって特有なことに、彼らは全面的に高度な生活の支配を受け、外的な暮らしには、これを見、これを処理すべきそれ固有の見地があるということがわからないのである。内的体験こそ圧倒的な意義を有するのであり、それゆえ、これを生活のための諸々の要求とバランスを保つことはいよいよ難しくなる。クライストにとってそうであったように、マレーにとっても真の実在性と言えるのは、彼の美術制作に具わる実在性なのであった。彼にとってすべてはここにおいて確かな価値を持ち、はっきりとした形態をとったのである。そこにおいて、彼はもっとも確実な判断を下し、もっとも高次の洞察を得ることができた。避けがたい日常生活の必要事には、彼ははるかに低い価値しか認めていなかったし、この場面では彼の眼は曇った。物事のつながりを理解しつつ、同時に、実際の目的を達成するために適切な手段を用いることができる、ということにかけては、彼の力はあまりにも不足していた。このことに関連して言えば、この気骨ある人物の真骨頂や筋を通す一徹さが現れたのは、まさに精神活動の領域であった。ここでは彼は一切の容赦をしなかった。あらゆる芸術は、つまるところ道楽ごとでしかない趣味の脆弱さには、厳しい、しばしば仮借のない制作が対置された。芸術は、自己の信念にどこまでも忠実な者たちだけが、目標を達することができる真面目なものだ、という証言をしたのも、故なしとしない。他方、クライストの生涯と同様に、マレーの人生においても、実生活をいささか些細なものとする事例にこと欠かなかったから、どちらの場合も、彼らの所行の多くに、近視眼的で、狹量な判決が下されるのを目にする機会を免れることは、できなかった。

しばしば友人たちには意外な思いがしたことであるが、クライストについて伝えられるちょっとした特徴の多くが、マレーにおいて再発見された。すなわち、仲間との付き合いにおける種の権勢欲や、周囲の者たちにまるで教師のように振る舞いたいという強い欲求、自分の体験や狙い、計画を告げるときにはいつも秘密めかして暗示にとどめたという習慣が、それである。さらにまた、たやすく不信に陥ることもそうであるし、好感を抱くことと嫌悪とが、また希望と絶望とがめまぐるしく入れ替わり、極度の自意識が感じられるかと思えば、たちまち、賞賛と成功とのほんのわずかな兆しにすら無邪気に喜ぶ、といったことに変ずることも、そうである。

もちろん、こうした二人の気性がいかに似ていようとも、多くの人にとっては、二人の違いは相当大きなものに映るだろう。だから、彼らは、この比較の正当性を承認しないであろう。クライストは彼の避けがたい結末を英雄の破滅に見いだす前に、自己自身と実生活を相手に、徹底的な戦いを繰り広げ、多くの勝利を収めていた。すなわち、このたくいまれな天賦の才能は、一連の輝かしい作品に永続的な表現を見いだしていたのである。マレーの友人には、これと比肩し得る何があるというのか。意欲は同等であったにせよ、マレーにはしかし言葉〔表現力〕が欠けていた。つまり、意欲がそこで同じように普遍的な意義を有する作品群にまで生長を遂げることになる、言葉というものが、欠けていた。マレーの場合の作品数はいつの場合でもわずかなものとならざるを得ない。なぜなら、それらは長時間に及ぶ情熱溢れる芸術活動の結果、生み出されるものであるが、そこにおける絶えざる格闘において、実に非凡な力は、消耗してしまっただからである。この点は認めざる

を得ない。しかし、この両者の比較が正当であると認められるのは、単に特定の、同様の特徴の場合にとどまらない。クライストの運命にその事実の放つもっとも強烈な光が認められるにせよ、マレーと同様、最も優れた人たちに数えられる他はない多くの人たちの、免れがたい宿命といえる、同一の偉大な事実が存在する。すなわち、無に帰すことで、まさしく人間本性の実に類まれな、もっとも高貴な卓越性が、最大の脅威にさらされるのである。世間に対して示す貴重な天賦の才能を、自力で護り擁護すべく、巨大な力を有していない者からすれば、実人生とは、抵抗と破壊の対象以外の何ものでもないのである。

われわれは、上述のように頁を割いてきたこの人物の人となりと生涯とをいま一度眺め、いかに非凡な性質がこの故人において一体となっていたかをありありと思い起こし、同時に、彼の生涯はいかに全面的な制約を受けたものであり、萎縮したも同然のものであったことかと思いをはせるならば、次のことは、人生の冷酷な不完全さを物語る一事として受け取るには及ばないのではあるまいか。すなわち、かくも類まれなものが、内外両面にわたる一切の障害から身をもぎ離すこともなく、また本来ふさわしい生活の高みに達するということなくして、永久に失われてしまうことになった、ということがそれである。われわれがこれまで見てきたこれらの個性ある人びとは、ごくふつうの運命とは別の、例外的な存在であるとすれば、ではいったい、世間の人びとの場合とどこが違うというのだろうか。彼ら二人の仲間が人生の闘いの中で生活能力と考えていたもの、これは、彼ら二人には欠けている。一方、彼ら二人には、人間生活にはじめてその最高の価値を付与するものがあるのである。まさしく彼ら二人の生活こそ、楽にしてやるべきだった。なぜなら、折節、人間本性の中で発達を遂げ、それを非凡な域にまで高める類まれな萌芽の中、そのひとつでも萎縮することがないように、彼らの生活が楽になればよかったのである。きわめて繊細で感じやすいものが冷徹きわまりない試練にさらされ、人生が与えるまさに最良のものによって、大半のものが無と化す、といったことは、たしかに避けがたい必然的な事柄であるとともに、人間関係の考察がわれわれに教えてくれるもっとも悲劇的な出来事のひとつである。

このわれわれの友人の生存時、時折、しかも辛い思いとともにわれわれの心をよぎったことに、この友人がかくありたいと望むことと、実際にそうであったこととを、よくよく考えてみる、ということがあったが、このことがまた、彼が没した現在、一段と鮮明に蘇ってくる。死は、生者にはいまなお残されている発展の可能性というものを、永久に断ち切る。そして、この一度に、ただこの一度きりに、個体化された驚くべき才能と資質も、彼とともに、謎多き自然の胎内へと、永久に立ち戻るのである。

もちろん、死者にも、いわば生き続けることが許されている。それはすなわち、彼の友人たちの追憶の中に生き続けることであり、また、彼が起点となって始めたすべてのことを、予測しがたいまでにどこまでも生き長らえさせることで、彼は生き続けるのである。

故人にこうした意味での生命を付与することは、彼の友人、教え子たちに課された課題である。こうした者たちがその課題を忠実に果たす限り、彼らは、この故人に対して、彼が生きている間に彼から受けたいっさいのものにつき、少なくともその恩義の一部を償還することになるであろう。

#### 訳者註

\* 翻訳文中における〔 〕内は訳者の補足である。

(1) Schills Tod シル(人名?)が敵の弾丸に当たって白馬(灰色の馬 Schimmel)の背に倒れ込んださまを描いた図のこと。 Meier-Graefe, Julius, Hans von Marées, Zweiter Band, München 1909, S.40, Kat.Nr. 57. Tod Schills参照。



- ( 2 ) ユリウス・マイアー＝グレーフェによれば、おそらくコンラート・フィードラー宛書簡、おそらく1867年。  
In: Meier-Graefe, Julius, Hans von Marées, 3Bd., München und Leipzig 1909-1910, Bd.3, 1910, S. 12, Brief Nr. 8. また, In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), Hans von Marées Briefe, München 1987, S. 24f., Brief Nr. 11. ( 以下の註においては、両著書の場合、書名等を略す。)
- ( 3 ) コンラート・フィードラー宛書簡, 1870年6月14日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 33f., Brief Nr. 36.  
In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 57f., Brief Nr. 38.
- ( 4 ) コンラート・フィードラー宛書簡, 1868年9月28日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 19, Brief Nr. 13.  
In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 39, Brief Nr. 19.
- ( 5 ) コンラート・フィードラー宛書簡, 1868年2月11日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 25, Brief Nr. 22.  
Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987では収録無し。
- ( 6 ) コンラート・フィードラー宛書簡, 1868年10月26日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 20, Brief Nr. 15.  
In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 41, Brief Nr. 21.
- ( 7 ) コンラート・フィードラー宛書簡, 1870年7月15日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 36, Brief Nr. 38.  
In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 59, Brief Nr. 39.
- ( 8 ) どの書簡からとられたものか、不明(以下、出典不明と記す。)
- ( 9 ) アドルフ・ヒルデブラント宛書簡, 1870年5月3日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 33, Brief Nr. 35.  
In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 56, Brief Nr. 37. 引用冒頭のM . については、MG 及び DommによればMarbachと明記されている。
- ( 10 ) コンラート・フィードラー宛書簡, 1877年9月21日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 164, Brief Nr. 270.  
In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 169, Brief Nr. 172.
- ( 11 ) コンラート・フィードラー宛書簡, 1869年1月4日付コブレンツ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 22, Brief Nr. 18.  
In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 44f., Brief Nr. 24.
- ( 12 ) コンラート・フィードラー宛書簡, 1870年10月5日付コブレンツ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 38, Brief Nr. 44.  
In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 62, Brief Nr. 43.
- ( 13 ) コンラート・フィードラー宛書簡, 1879年9月17日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 194, Brief Nr. 318.  
In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 196, Brief Nr. 204.
- ( 14 ) コンラート・フィードラー宛書簡, 1881年12月24日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 224f., Brief Nr. 354.  
In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 229-231, Brief Nr. 235.
- ( 15 ) 原語は Verweiflung. これは Verzweiflung の誤植と考える。Hans von Marées. seinem Andenken gewidmet von Conrad Fiedler. Dritter Druck der Horst Heiderhoff Presse Frankfurt am Main 1969, S.37では、後者、 Verzweiflung となっている。
- ( 16 ) コンラート・フィードラー宛書簡, 1876年6月12日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 140, Brief Nr. 228.  
In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 146, Brief Nr. 147.
- ( 17 ) コンラート・フィードラー宛書簡, 1883年1月29日付ローマ(ただしフィードラーにより 1882年と訂正)。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 232, Brief Nr. 362.  
In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 238f., Brief Nr. 239.
- ( 18 ) コンラート・フィードラー宛書簡, 1877年12月23日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 169, Brief Nr. 278.  
In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 172, Brief Nr. 176.
- ( 19 ) コンラート・フィードラー宛書簡, 1876年7月15日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 142, Brief Nr. 232.  
In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 148, Brief Nr. 150.
- ( 20 ) コンラート・フィードラー宛書簡, 1871年7月18日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 49, Brief Nr. 71.  
In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 72, Brief Nr. 58.
- ( 21 ) コンラート・フィードラー宛書簡, 1888年4月28日付ローマ(ただしフィードラーにより 1880年と訂正)。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 205, Brief Nr. 333.  
In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 208, Brief Nr. 217.
- ( 22 ) コンラート・フィードラー宛書簡, 1879年9月1日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 191, Brief

Nr.316. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 192, Brief Nr. 202.

(23) コンラート・フィードラー宛書簡, 1872年12月6日付ドレスデン。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 64, Brief Nr.105. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 89, Brief Nr. 78.

(24) コンラート・フィードラー宛書簡, 1874年8月6日付カスタニェット (Castagnetto)。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S.103, Brief Nr.167. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von),1987, S. 120, Brief Nr. 115.

(25) アドルフ・ヒルデブラント宛書簡, 1872年11月6日付ドレスデン。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S.63, Brief Nr.101. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 88, Brief Nr. 76.

(26) アドルフ・ヒルデブラント宛書簡, 1868年11月21日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius,1910, S. 22, Brief Nr.17. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 43f., Brief Nr. 23.

(27) 引用文中, ここまで, アドルフ・ヒルデブラント宛書簡, 1871年7月20日付ベルリン。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 50f., Brief Nr.72. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 73f., Brief Nr. 59. ただし, [ ] 印の箇所の中略部分がある。

(28) 前註より後の引用部分については, 出典不明。

(29) 出典不明。

(30) 出典不明。

(31) 出典不明。

(32) 以下, ミュンヘンのノイエ・ピナコテークにあるマレーの《求婚》についての言及と思われる。

(33) これが《求婚》についての言及だとすれば, 階段部分にいるのは一人の子供しかいない。フィードラーの言う男性は画面手前の地面に立っている男性のことか。

(34) 出典不明。

(35) ギリシア神話。アウゲイアスはエリス王で多くの牛を所有し, その小屋は30年間も掃除したことがなかった。なお, その溜まった牛の糞をヘラクレスが十二の功業の一として, 一日で掃除したことはよく知られている。

(36) コンラート・フィードラー宛書簡, 1873年ドレスデン。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S.67, Brief Nr.112. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 92, Brief Nr. 83.

(37) der Archimedes-Zustande意味不明。

(38) 後は野となれ山となれ, の意。

(39) コンラート・フィードラー宛書簡, 1878年3月12日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S.174, Brief Nr.285. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 177, Brief Nr. 181.

(40) コンラート・フィードラー宛書簡, 1884年11月7日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S.280, Brief Nr.448. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 282, Brief Nr. 288.ただし, 引用文末は, G.Boehm, 1971ではentgegengetretenであるが, M-G及びDommでは, entgegenleuchtenとなっている。Boehmに従う。

(41) コンラート・フィードラー宛書簡, 1885年3月7日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S.284, Brief Nr.455. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 286, Brief Nr. 294.

(42) コンラート・フィードラー宛書簡, 1876年11月12日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S.149, Brief Nr.244. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 155, Brief Nr. 158.

(43) 出典不明。

(44) コンラート・フィードラー宛書簡, 1880年1月8日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius,1910, S.200, Brief Nr.326. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 203, Brief Nr. 212.

(45) コンラート・フィードラー宛書簡, 1882年3月17日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius,1910, S.236, Brief Nr.365. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 245, Brief Nr. 242.

(46) コンラート・フィードラー宛書簡, 1883年12月9日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius,1910, S.263, Brief Nr.409. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 269, Brief Nr. 268.

(47) コンラート・フィードラー宛書簡, 1884年1月10日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S.265, Brief Nr.416. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 271, Brief Nr. 271.

- (48) コンラート・フィードラー宛書簡, 1885年12月28日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S.289, Brief Nr.467. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 290, Brief Nr. 301.
- (49) コンラート・フィードラー宛書簡, 1887年1月5日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S.292f., Brief Nr. 480. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 293, Brief Nr. 307.
- (50) コンラート・フィードラー宛書簡, 1887年1月5日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S.293, Brief Nr.480. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 293, Brief Nr. 307.
- (51) 出典不明。
- (52) コンラート・フィードラー宛書簡, 1876年9月29日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S.147, Brief Nr.241. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 153, Brief Nr. 156.
- (53) van der Helst. おそらくバルトロメウス・ファン・デル・ヘルスト。Bartholomeus van der Herst 1613-1670。オランダの肖像画家。
- (54) アドルフ・ヒルデブラント宛書簡, 1869年8月23日付コブレンツ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S.31, Brief Nr.31. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 54, Brief Nr. 34.
- (55) 「ここ」というのは, Boehmの原文では一応, パリ, ルーヴル美術館のことを指すと考えられるが, マレーの書簡原文ではより限定されている。次註(56)を参照。
- (56) アドルフ・ヒルデブラント宛書簡, 1869年7月23日付パリ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S.30, Brief Nr.30. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 53, Brief Nr. 33.ただし, Boehmによる原文の引用文中, 冒頭部分は, 書簡原文では, während der wenigen Zeit, die ich bis jetzt auf die Sammlungen der Sculptur verwendet habe,となっており, この部分を訳せば, 「これまで彫刻コレクションでは僅かな時間を費やしましたが, その折では, 」となる。
- (57) コンラート・フィードラー宛書簡, 1882年2月5日付ローマ。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S.235, Brief Nr.363. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 243, Brief Nr. 240.
- (58) コンラート・フィードラー宛書簡, 1871年4月10日付ベルリン。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S.45f., Brief Nr. 63. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 68, Brief Nr. 52.
- (59) 出典不明。
- (60) アドルフ・ヒルデブラント宛書簡, 1871年7月20日付ベルリン。In: Meier-Graefe, Julius, 1910, S. 50, Brief Nr.72. In: Domm, Anne - S.(Hrsg. von), 1987, S. 73, Brief Nr. 59.
- (61) Heinrich von Kleist 1777-1811.ハインリヒ・フォン・クライストは, ドイツ文学において「近代文学の先駆者の最も苦悩的な生涯」でもって知られる作家である。手塚富雄・神品芳夫著『増補 ドイツ文学案内』, 岩波文庫による。
- (62) クライストの引用, 出典不明。